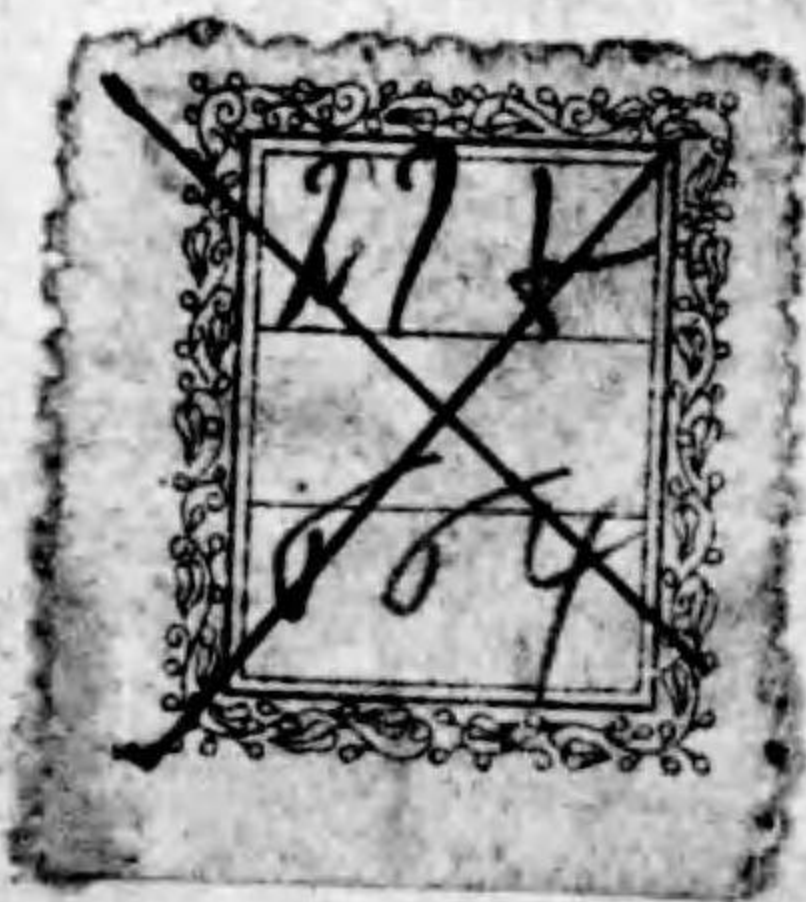




警清

ホ子ノムシ

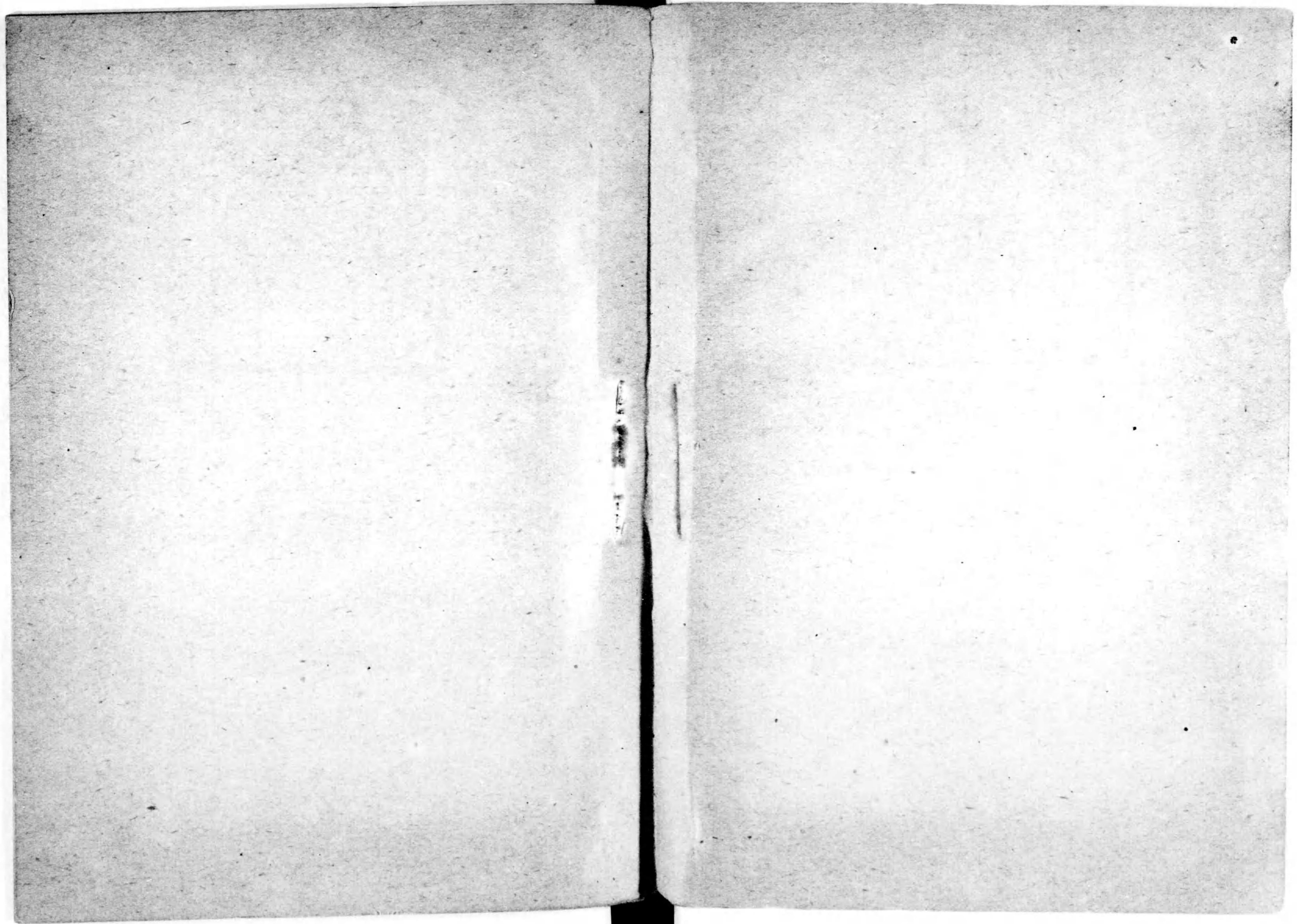


宇根義人著



始





はしがき

「又お出懸になりませんか？」「何處へです。」これは日吉堂御主人の問ひで私の答であつた。此の話から纏つて生れたのが本書であります。

旅行家と云はれてゐる著者も、また若いだけに新婚旅行だけは未経験の中に納めてある。たゞ今後何時か、と期待する理想と、さるお方の實驗談とをまるめ込んで書いたのが本書の内容である。過ぎた御方には笑つていたゞき、年若の男子の御方には御参考に、そして妙齡の方には讀んだ上御氣に召しましたなら、此の著者へ大至急結婚の御申込み有之度く、七重の膝を八重にまで、と鼻の下をながくかしく

大正五年六月六日

著者識

滑稽
ホーネームーン目次

- 一、その第一日……………一
- 二、相談さうだんの相談さうだん……………二
- 三、五ヶ年ねんぜん前から……………二九
- 四、そうだ東ひがしへ東ひがしへ……………三七
- 五、お里さとが近ちかい……………四九
- 六、ハイ左様さやうなら……………五九
- 七、日光にっこうより……………六六

- 八、それは危険だ……………七九
- 九、曲線美だよ……………八五
- 一〇、車窓ローマンス……………九七
- 一一、おごつて頂戴……………一〇八
- 一二、直實様のお歸り……………一二二
- 一三、飛んだ喜劇だ……………一二八
- 一四、だまつておいで……………一五四
- 一五、晴れるまで……………一六六
- 一六、奥のほそみち……………一七四

- 一七、苦しかつたわ……………一八五
- 一八、起床なる先きに……………一九七
- 一九、奥州から信濃路へ……………二〇九
- 二〇、二度びつくり……………二一九
- 二一、内所ばなし……………二二三
- 二二、理想の新家庭……………二四六
- 二三、何と願つたの……………二五八
- 二四、お門違ひでせう……………二六六
- 二五、日本アルプス……………二七七

二六、 あら大變よ……………二八五

二七、 二人の心の關ヶ原……………二九五

目次終

滑
ホ子ームーシ

宇根義人著

一 その第一日

汽車はもう相模の海岸を走つてゐた。兩人ともそれまで、何だか物を云ふ氣になれなかつた。

『恐ろ音ね——』

『何が……なる程』

昨日から初めて花嫁に成つた新しい妻に、東京を出てから初めて

言葉らしい言葉をかけられて、ドキマギし乍ら窓外を見ると、列車は今馬入川の鐵橋を渡つてゐた。火急で、押出したので聽神經や視神經の働きよりも、「何が」の言葉が先きに出て了つたのだつた。はつと思つて新妻君のお顔を視ると、これもまた頗る面喰つたらしい。半分笑つて残りを藏つて置くと言つた様なその顔は、恁んな評辭位ゐでは何處へも足りやしない。口を聞かせるのが氣の毒とも何とも思はず、己れも遂また無言の行を初めることにして了つた。

雷が熱湯の中へ落込んだ時の様な、首から上の活劇が少し静まつたと思ふと、「フ、。」と云ふ笑ひ聲が後ろの方から耳を突いた。何だか我々の先刻の有様を見て笑つてゐる様に思はれる。

『汽車に乗つて居ては自働車は要りませんよ。』

次で恁う云ふ母人らしい女の聲も聞えた。ハ、ア人體瓦斯——と想ふと、平常なら一寸福々しくなるのだけれど、何だか先きの笑ひ聲が、それを笑つたので無く、どうも我々兩人の容子を笑つた様に許り想はれてならない。「否そうで無い。」と想ひ直して見ても又忽ち、少なくともそれとこれとを取交せて笑つてゐるのだとしか思はれ無い。何だか困しくつて堪まら無いから一そのこと無念無想の状態にでも這入れ、ば幸甚と、再び何も想はぬ様にして、新妻君と調子を合せて目前の板と睨めつこを初めることにした。暫らくの後、

『貴郎——此所で無くつて——。』

『ウム。』

驚いた様に顧ると列車は留つてゐた。そして左の方にゐた新妻君の鼻の先きと驛名表示の文字とが同時に目に付いた。

平塚、大磯、二宮などの停車場は何時の間に行き過ぎて了つてゐたのだ。ゴウ／＼する汽車と云ふセコンドは、素敵に時を刻むのが早い様な氣がする。がそんなことを、一々感歎詞として語つてゐるところでは無い。世界中の働きを一人で引受けた様な氣持で、非常至急二三の手荷物を抱へるが早いか構内へ飛出して仕舞つた。出口へ行つて邊りを見ると新妻君は居ない。振返つて見るとまだ六七間も後方を歩いてゐる。切付を渡して置いたことを思ひ出したので

なんだか特別に心が急ぐ様でならぬ。それであるのに、人並以下に尺の短かい新妻君は、逃げる人でも追ひ驅ける様にも歩か無い。何時も明るい氣分の漲つてゐた國府津の停車場までが、今日に限つて灰色の嵐の様に思はれる。

歩るき出すと電車が目の前に停車つてゐた。

それから一時間許りの後には、私たちは小山原の海岸を水近く歩んでゐた。

『貴郎その邊で休息ませうか?。』

『そう／＼、一寸休戦することに致さう。』

『あら休戦ですつて?。』

『そうさ己れは先づ以て今日は戦争してゐる様な氣持がする。』
『お弱いことオホ。』

『さアさう云へばさうも云はれ様、一寸見は己れは如何にもやさし
相な男子だからね、確かに一寸は然う見へるかも知れんね。』
兩人は何時かある松の樹下に立つてゐた。

『妾こゝよ』

新妻君は恚う云ひ乍ら石の上を亘る松の根を指して云ふ。タオルを
取出して渡すと己れは傍の石に腰を墜した。

太平洋の海水は相模灘から大きい灣をつくつて、直ぐ吾々の目の
前に寄せてゐる。静かな初夏の陽に輝らされる潮の面は狂人が昏睡

の状態にも似てゐる。けれどその荒んだ血管のまだ腫れ上つて観え
る以上に、モクリ／＼運び來り運び去る様な波浪の中には平和に備
戦と云つたよりも尙激しい或物を示してゐる。函嶺は富士の尖頭を
雲の様に浮べて、伊豆の連山に續いて峙つてゐる。

私等二人は暫時又云ひ合せた様に沈黙をまもつてゐた。

『貴郎。』

『ウム。』

『貴郎は今日は眞個に變つてゐてねえ。』

『さアさうかしら……。』

『なんですよ何時も随分強固した様な容子なのを、今日に限つて何

だか火急あわてたり落付おちつきが無なかつたりする様やうですもの。」

「イヤ全まったくさうなつたか知しれん……。」

「實際じつさいなんですよ、そんなに落着おちつきが無なかつたり一寸鬱ちよつといだ様やうにして居をりますと、斯こんな處ところなどに居をりましたは、他人ひと様が觀みたら變へんに思おもふかも知しれませんよ、ねえ止やめて頂戴ちやうだいなね貴郎あなた……。」

「變へんに——そんな言葉ことばは止よして呉くれ、先刻さつきホラ網あみの修繕しうぜんをしてゐた黒くろい男達をとこたちも『一寸お安やすくない……』と云いつて居わたちや無ないか？大だい丈夫じやうぶだよ、それに最もう己おれも今考いまかんがへて見たみたが滑稽こつげいだつたらうと思おもふ、で今いまが今實際いまじつさい何時いつもの鐵夫てつをに歸かへつたから。」

「エ、止やめませうよ。」

「それに此處こゝは幸あきケ濱はまだぞ、畏おそれも。」

「オ、さうでしたか御幸みゆきケ濱はま？、すると彼あの度々たびお話はなしのあつた大學だいがくの大杉生先おほすぎせんせいの別莊べつさうも此この邊へんなのでせう？」

「さうぢや。」

「では随分ずぶん此この地方ちほうには歴史れきし上じやうにもまた現代げんだいにも澤山たくさんのローマンチツクなお話はなししたところねえ、貴郎あなたお話はなしして下くださる？」

「話はなしもある、語かたるのも好よいさ。」

「では話はなししてよ、妾わたし足利氏あしかがしから北條氏ほつどうしなどの時代じだいのことを少しは學がく校かうで覺おぼえてゐますけれど、頼朝よりともの陰かげれたてふ石橋山いしはしやますらまだ何なにの邊へんか知しら無ないのよ。」

『石橋山、七騎落ちの舊蹟は彼處だよ。』

己れが指すと新妻君も目を西へ向けた。

『何の邊ですつて?』

『彼處く、ソラ山が少し出たり引込んだりしてゐるだらう、ね一寸した山が別に取付けた様にも見える、麓から僅か十二丁なんだ舊蹟までは。』

『あ、彼の邊ですか、妾には良く解りませんが、マア場所だけは大方解りましてよ、何時か案内して下さる?』

『好いさ……。』

己れの返辭は劍術の先生が三ツ子の刀を受ける時の様に何うして

か輕かつた。

暫時の後兩人は又街の方へ向いて松樹の間を緩歩であつた。

『貴郎——今夜も今日の日誌を書けて?』

『それは書くさ。』

『獨特の表題はね。』

『さア……無言の行が良からうハハツ。』

『さうホ、。』

二 相談の相談

電車には客が充満に乗り込んでゐた。それでも天の與へか己れと

新妻との腰を下ろす席だけは取つて置かれたかと思ふ様に空気があつた。國府津までの汽車の中で不格構な田舎人が、太い手で刻煙草をキセルに詰め込んだりなどしてゐるのが多かつたのに、電車に乗ると急に變つて、前懸をきちんと締めた商人らしい男や、二三のお里へ客にと云つた風の、兒を連れた在郷のお婦人さん位ゐるの外は、大方都人の乗客であつたが、小田原から今乗り込んで見ると、殆んど今度は湯治遊山の人人許りの様に見える。若し知つたお方でも居合せはすまいか、恚う思ふと何だか己れはまた汽車の中の二の舞ひを行りはしないかと云ふ様な心配が起つて來た。然しそれでも今は餘程平氣に構へられる様になつてゐる。新妻君はたゞ沿道の風景

を眺めてゐる。小山の麓に後側を並べた二三十戸の家のある裏手の田圃に設けられた停留場で停車して出でからは、今までの廣い場所は、何處へやら、電車は山と山との谷間を小川に添ふてだんだら登りに走つてゐる。

乗合ひの人々は只時々窓外の眺めをする許り、碌々話し合ふ者すら無い。己れはたゞ殆んど貰ばかりふかしてゐた。

湯本で降りると兩人は直ぐに俥に乗つた。温泉街の店々には、繪葉書や寄木細工や挽物の玩具などの並んだのが多くあつた。歩いて居る人たちを見ると、何れも大方緩やかに、閑暇さうであつた。父や母に連れられた危な氣に歩ゆむ兒供の手には何の兒もくおそら

く玩具の人形などが首を振つてゐた。ザワ／＼音をたて、多くも無い水が走流れてゐる其上へ、高く短かく架けてある谷川の木橋を渡る時、

「旦那さまあれがさうですよ、彼の三階が……。」

慙う云つて先きに立つた俣夫さんは腰を延ばし乍ら振返つて己れを見る。

「ハ、ア一寸佳いですな。」

己れが答へ乍ら振向くと新妻君も同時に視線を俣夫さんの指先の方へ向けた。一丁許りと思はれる先きに一段高く三階の木羽屋根の大きい建物が見える。他の二階造りなどは何れもこれも何と無く

坂の途中に引付いて居る様に思はれた。それから間も無く、

『此家です。』

『成程』

大きい石門の中に幾本かの庭木が植ゑられて河砂利の敷かれた先の玄關には「函谷館」の金文字が其横額に光つてゐた。

兩人は玄關近く俣を降りた。

「入らつしやいませ——何うぞお上り下さいませ。」

二人の女中さんは云ひ乍ら静かに手を支いて禮をすると、並んでゐた履物の中からスリツバと草履を特に入口の真中に直して呉れた。

新妻君が俣夫さんにお金を渡す時は、既に兩人の荷物は階段に積まれてゐた。長い廊下を通つて、廻り乍ら登る階段を上つて行くと、奥まつた處に孤建の様な八疊間があつた。兩人は案内に従つてそこに陣を取ることにした。

室内には一片の塵もなく、建具の椽から柱に至るまで一種の光澤を示して、床の間には山水の畫の前に花あやめの、生る共無く作らへられたのが特に私たちの心持を嬉ばせるのであつた。

手にして來た座蒲團を私たちに進めると、女中さんは廊下の傍までさがつて、

「ようお越し下さいました。何うぞおゆるりと御休息なさつて下さ

いませ。」

憊う云つて丁寧にお辭儀をされて出て行つた。やがて荷物も運ばれる。貰の火もお茶も運ばれた。茶を飲んで兩人の前に進めると、

「何うぞ御用が御座いましたなら、御遠慮なくお呼び下さいませ……。」

さう云つて又頭を下げた。直ぐに女中さんは去るのであつた。

湯から上つて新しい寢巻に包まれてからは、己れの心持は全然落付いて了つた。食事の時なども全く悠々と構へ込んで、笑ひ乍ら済ましたのであつた。斯うなると流石は他人から旅行學校卒業生と云はれてゐるだけあつて、新參の豆腐屋が、二錢の豆腐一とつ割つた

程にも思つちや居ない。それに引替へて新妻君ときたら全然で十五六の小娘が、初めて伯父さんの家へ客に行つた時よりも以上に他家へ行つた様に見える。己れはこれが他方の顔が不動様に笑はれた様なものかなと思つてよく見ると、可笑しくなつて堪らない。

「ハ、ツ。」

と己れは遂に笑い出して了つた。

「貴郎——。」

「何に?。」

「可笑しくつて?。」

「何だか己れは今可笑しくなつたのさ、一體君はどうしたんだい。」

「妾し——何だか淋しいのよ……。」

「そうだらう——旅馴れない者は旅館へ泊ると初めの晩などは寝ても眠られないと云ふからな、淋しいだらうさ、無理もない。」

己れは同情と云つた様な氣持で恁んなことを云つて、また新妻の顔を見るのであつた。

「貴郎は初めて旅行なされた時淋しくはなくつて?。」

「少しは淋しいことも有つたさ、然しそこは男子だからね……。」

「そう……。」

と云つて新妻君は己れの顔を初めて見る様に視た。己れが何とも云はずにゐると、

「妾——でも好いは……。」

新妻は淋し相にまた捨てる様に云ふ。

「大丈夫さ、己れが伴いて居るものを、淋しいも何もあつたものぢやないさ。」

「ソウです、ですから妾いゝのよ。」

「それはそうと、己れは君に相談があるよ。」

貰の灰を火鉢におとし乍ら己れが云ふと、新妻君も一寸改たまつた。

「なにそんなに改まることも無い。大した相談でも無いけれど、これから此の旅行中のことに就つて少し相談しておき度いことがある。

るのだ。」

「それは何んなことでせう……。」

と云つて少し頸を傾けて新妻君は、

「何ごとも卒業生の貴郎の好い様に願ひませう。」

「イヤおだては要りませんよ、それぢやア相談になら無くなつて了ふ、と云つて成程不可解かもしれんね、マア聴き玉へ。」

「エ、話して頂戴。」

「話さう——第一に先づ君を己れが呼ぶ時の呼び方だね。」

「ナホ、。」

「可笑しい——全くだよ、そうだらう、——「君」と云ふとキミと云

ふ名の様でもあり、また朋友でも呼ぶ時の様な気分もするし。」

「オホ、そうねえ——では名を呼んで頂戴な。」

「さうか、そうだね、「多美江」、何だか變な様に思へるな、多美江さん、多美江君、オツこれでは又逆戻りになつて了ふ。」

「ただ多美江で好いちやありませんか。」

「さア——マアそうすることに仕様。」

「貴郎相談てふのはそれ?。」

「君も随分暢氣だね、只君の名を呼んだ許りで旅行は出来無いぢやないか。」

「それはそうですけれど。」

「これからが所謂相談の相談なんだよ。」

「そうでせう——、すると第二は何ですか?。」

「第二、そうだな先づ第二だな、ホラ君、何うもいかな、又君にして了つた、何でもい、彼の番頭の宿帳付けに来た時君は何んと思つたね?。」

「妾し、一寸變な気分がしてよ。」

「然うか、尤も、然しまだ好かつたのさ、斯うして澤山の客があり、人を見る明のある番頭の居る場所だから、直ぐに兩人を新婚の旅、と見て了つたのだつたからね、豪る者さ、然しそれが、場所に依つては中々そう許り行かぬからね、所謂相談と云ふのは其處にあ

るのだ、詰り、做れない兩人の容子が、兄妹共付かず、夫婦とも見えないと云ふと、とんだ遊冶郎君などに見られることもあるのだからね。」

「オ、相うでせうね、では何うすれば好いのでせう……。」

「何うすると云つて正直に告白するのが一番さ、然しそれではまた面白く無いのだ、今度の我々が目的とするところと矛盾するから——そうだらう、東京驛で川路君に別れる時も云つたらう、我々は此の旅行を頗る面白可笑しく行つて或る筆の材料を集めると共に充分君等へ對しても話しの種を土産として持つて歸るからつて、だから臨機應變、時に依り、機に臨んでは滑稽たつぷりに行

るのも良からうと思ふのでね。」

「そうね、で妾しは——。」

「だから君も、時に妹にも成り、細君にもなり、或は己れと云ふ此の好男子と謠曲式な道行をした、大家のお嬢さんにもなつて呉れたらと思ふのさ。」

「妾しそのお嬢さんは御免蒙り度ひですわ。」

「さうかハ、ツ。」

「オホ、。」

「これだけ相談して置いたなら良いだらう、以前「其名もやさしい小石川」何とか唱はれた女學校卒業の多美江さんだから、其邊は

又上手く行つてくれませうから。』

「椰搦ちやいやよ、冷評さなくつても宜いわ。」

「イヤ冷評は止さう、先づ第二の問題も此の位で止めておかう、

「オ、ソら一つ習つて見やうか、己れが兄だよ、オイ多美江さん。」

「エ兄さん何ですか。」

「イヤ上手いく、ハ、ツく。」

「オホ、、、。」

相談ついでに己れは一寸此處で皆さんにも申上げておくことがある。兎角世の中の人々は花嫁だ花婿だなど云ふと、何んな鼻の

ケてゐる嫁ごでも、何れ程ちんばな醜男の婿どんでも、大層なお騒ぎで見たがるものだが、己れと多美江と來たら全く龍宮の乙姫さんや浦島の太郎さんなどはそつち除け以上なのだから、精々見てもいたいき度いと思ふので一寸御披露申上げて置きます。

黄縞のお召の上に紫縮緬の羽織をお召しに成つてゐるのが多美江さんで、己れは羽二重の五ツ紋付きに高貴織の着物を着て仙台平の袴を穿てゐるが、これはほんの平常着、いざと云ふ時は旅行鞆の口さへ開けば、もつと上等のものが這入つてゐるから御承知を願ひます、然し袴だけは時々穿いて居らぬことも今後ありますから、是れは場合に依つて御推察を御願ひして置く次第、ところでこれはほん

の人間の身を包む風呂敷ですから次ぎにお顔などもびよつこり出しておくことに致します。

鼻が高く鼻筋のすつと通つてゐるのは己れの祖先が豪かつた。その賜で、兩眼はバツチリと開ゐて眉毛は太く横に一文字と云つても程良く延びてゐる。口は大きくも無ければ小さくも無いが、笑ふと一寸反り氣味の粗い齒で煙の爲めに色の付いたのが出ること。髯は當今流行の短かく缺を入れたハイカラ、全體から云ふと面長な顔は如何にも大家の子息らしく、身の丈は五尺二寸の中肉並、先づこれが此の鐵夫の自然的人間の全體です。おつと忘れましたが頭は眞中から兩方に分けたこれもハイカラである。

實は妻も十人並を少し上に出た位のもので、丸ぼちやの顔はキリツと締つた口元に愛嬌をたへて、眉毛はやさしい三日月形、目はバツチリとしてはゐるが大きくも無い方でそれも愛嬌あるのが取處、鼻などは並であつて色だけは少し白い方一寸全體に賑かな顔をしてゐる。髪は大正式のハイカラたゞ少し身丈が短かいことだけは欠點だから見ないでおいて呉れ。

三 五ヶ年前から

翌日一日は多忙しかつた。朝湯に這入ると疲勞れるからと云ふ己れの經驗からの割出しで、多美江も朝は顔を洗つた許りで、先づ食

前運動としての早川、須美川兩河岸の散策と探勝探見とを初めとして、朝食後は間も無く飛び出して數丁下方の曾我堂を訪ふと、曾我兄弟の木像から、切腹に用ひたと云ふ短刀、十郎の髪の毛、五郎の指爪などの種々の遺物を見る。次いで訪ねて行つたのは湯本中での小平原地に小千年の歴史を語る早雲寺、大永年中北條氏綱の建立と云ふ同寺では、年老ひたお僧さんの住職が快く迎へて呉れて北條氏の歴史を語つて呉れるやら、重々しく木像の早雲を拜ませて呉れるやら、危険な相な足どり、北條氏の菩提所だからと云つて一々古い石碑の邊りまで案内して呉れるやら、果ては種々の繪葉書やら略圖やら本までも、物好きに己のことで買込んで忽ち手荷物が出来

たので、午近く一旦宿へ歸つたが、又食後は出かけて今度は川上へ湯坂道を行つて見たり、底倉道を一寸往復したり、其上箱根官道を登つて宮の下から小涌湯の近くまで飛び廻つたので、全然疲勞れて了つて夜は晩食を済ますと、早々日誌を着けた位のこと、二た晩目の旅の夢路を辿つたのであつた。其爲め己れの體は兎に角、多美江ときたら大した騒ぎ「妾し今日は身體中が痛む様で堪まりません」など、云つて中々動き出さない。昨日買つて來た本を讀んで見たり、また其後一切の買つたものを小包にして、送り出す様にした位のこと、碌々湯にも這入らずに居る多美江の傍で、己れも昔しの箱根道を往復した人々の狀況などを聯想して見るとか、三度

一寸表に出て僅か許り散歩した位のこと、遂午前の半日は過ごして了つたのであつた。其間一昨日着いた時に案内して呉れた女中さんが、時折來ては「嘸お疲勞れで御座いませう。」などお世辭を云つて行つたり、用も無さ相な他の姉さんたちまでが、時偶廊下を通りかゝつて、心付けの御禮に來た時と同じ様な、丁寧なお辭儀を仕て行つたりなどして、私たち兩人の容子を熟く視度い様な風であつたりするのであつた。

『多美江さん。』

『ハイ何ですか?』

『オウ、全然兩人共上出來だね。』

『でもまださんを付けるぢやありませんか、只今は閑暇ですから、い様なもの、急ぐ時などはさんを一々云つてゐるのは面倒ぢやなくつて?』

『さア、そうかも知れんね、ぢやア行つて見ようか、「オイ多美江」ハ、ツ。』

『オホ、——貴郎オイですつて、コラ、オイなどと云つた以前の巡查さんの様ですなえ——。』

『成程、それでは「多美江」ハ、ツ。』

『思はず己れは聲を大きくして了つた。』

『貴郎他人様が何かと思ひませうよ。』

『では止めよう、——時に何うだ一寸其の邊を散歩して來様ぢや無いか。』

『イエ、妾し御免を蒙ります。』

『そうか、一人では最う止めて置かう——ウムそうだ、其鞆の中から日誌を出して呉れ、古いのをだ。』

『ハイ五冊共皆んなですか？。』

『そうく皆出しく呉れ。』

多美江は新しい旅行鞆の中から古い懷中日誌の五冊を取出して己れに渡した。己れは此の時、風變りの旅行を思ひ立つたので此の旅行にも重くないからと云ふので最近五年間だけの懷中日誌を荷物の中

中に納めて行つてゐたことを讀者諸君の前に告白しておく。

己れは其中の二冊から、此の地を過ぎた時の記事を二ヶ所見出して讀んで見て一人で微笑んだ。其一方は或年の夏、三人の朋友と此地に來つて一晩宿りで風光の讚美から、温泉の泉質調査、果ては歴史の研究までして、前の日の夕方着いて、翌る日の午後の一時過ぎに出て行つたことが細々と書いてあつた。また一方は、成つた許りの商人としてまた忽ちお終ひにした其日通り過ぎて行つたことが書いてあつた。其の記事は次ぎの様であつた。

某年某月××日、曇り雨あり、寒暖普通として見出しには少さく變裝旅行、大きく箱根發足東都に歸る、と書いて、それが赤いコッ

ビーで染めてあつて次ぎに本文が細文字で書いてある。

今日中に歸京を決して宿を辭せば十時、元箱根を貫けて直ちに宮の下方面に急ぐ、蘆の湯に來れば昨日降りたりし積雪正に數寸あり、寒氣甚だ強し、連山幽谷を眺望しつゝ宮の下に着すれば時既に午たらんとす、此の地又名ある温泉場にして、凡事眼を驚かす許りなり、同地を徘徊すること時餘にして湯本方面に下る、途路殘品を賣きて宮の下に着けば既にして夕たり。

六時二十分發電車に依りて小田原に進み國府津に出で、次いで七時四十五分列車の中の人となり海道を直進して此處に着せしは十時半なりき、品川驛に下車して電車に乗ずれば速りに我がハート

に襲ひ來るものあり、曰く激甚なる生存競争の状々、噫今よりは再び東都の人、而して大いに活躍せんとす、たゞ盡す可きはベスと而已乎。

餘程昂奮でもしてゐたと見えて、場所を間違へたり、トンチンカに書いてあつたりする。「讀んで聞かせてつ」と云ふので讀んで聽かせてやると多美江すら笑つてゐた。「随分角張つた文章ね」など、云つて。

四 そらだ東へ東へ

その夜は二人共たゞ身も心も倦怠に包まれて了つたので、充分睡

眠つて疲勞れを抜かうと云ふことにして、まだ早い九時過ぎ床に就いたのであつた。

翌る朝目が覺めて見ると大分明るい。跳起きて障子を開らくと、朝の陽はキラ／＼と輝つて、室内までも差込むのであつた。電鈴を押して宿の者に起床を告げると、直ぐに私たちは浴場に足を運んだ。五分間入浴と云ふサツとした朝湯を済ませて室に戻ると、凡ての物はちやんと形付いて充分に掃除までされてあつた。少しはお湯に馴れて來た爲めもあらうか、且つは五分間と云ふ短かいそれであつた故か、兩人共昨日の疲勞れまで全然何處かへ行つて了つて、元氣も充分に快復した上、少しも浴後催す身體の緩味さへ覺へない。直ぐ

に百哩競走にでも飛出せる様な氣持がする。巻煙草を持つた手で馬鹿に勇氣が付いて、投げ出したならば屹度小銃の玉位には勢ひがあつて、二千メートル位はシガーが飛んで行き相な氣がした。ところへ女中さんは行つて來て、

『お食事は如何で御座いますせう？』

と云ふ。己れは机の上の懷中時計を振り返つて見て、

『さア、最う八時ですな、頂きませう。』
と答へた。

『では直ぐに持參いたします。』

憊う云つて女中さんは草履を軽く曳き乍ら、長い廊下を歸つて行

く。
『多美江さん直ぐ戴けますかね。』

己れは多美江に相談せず云つて行つたので、何だかこゝろ濟まぬ様な氣がして慙う云ひ乍ら新妻の顔を見た。

「エ、貴郎さへお宜かつたなら……妾しお茶を戴くまでは變でしたけれど、お茶をいたゞいてから全然もう早く御飯をいたゞき度い様な心持ちになつてよ。」

云ひ乍ら新妻君はニツコリして見せた。

間も無く食膳は運ばれた。兩人は直ぐに箸を握つた。まだ己れの多美江より二たつ年下の十七歳だと云ふ女中さんは、己れがちよつ

ちよつとキツカケをするので、話す心算も無かつたらうが話し出して、小田原の或商店の一人娘であるが一昨家が破産したので遂に學校も這入つた許りで退いて了つて、父が復活するまで僅かの間と云ふことで、それには相當な處で無いと、墮落する様な事があつては困るからつて、此の客種の良い函谷館へ行儀作法の見習旁々奉公して居りますが、幸父や母の寝る目も寝ないで飛び廻つて働いて呉れた甲斐があつて、今年中には膝下へ引取れるからつと、遂此の十日許り前にも母が來て話して呉れたのでしたなど、喜ばし相に語り乍ら給仕して呉れた。

昨日の夕方相摸の海で獲れたのだと云ふ鯛の刺身や、名も知れ無

い料理のいわしなどが素敵に美味かつたものゝ、扱何んな味だつたか知れ無い程、其癖暇を缺いて居乍ら己れは火急て、飲み込んで了つたと見えて、箸を置いてから考へて見ると、宛然夢を見て眼が覺めたとき、クルリ寢返つてから考へる様に何が何だつたか解ら無くなつて了つてゐた。

女中が一切の物を運び去つた後、居直つて新聞を見てゐた新妻君が突然、

「貴郎——今日は」と云つた。

「上天氣ですわね」己れは答へた。

「オホ、否お天氣は解つてますがね」

「然し己れはひつじだかさるだかそんなことは届外中立さハ、ツ」

「いゝえ九星など妾だつて構ひはしませんわ、オホ、。」

「然うか、ちやあ何だね。」

「お出かけですか、此宿にお在ですかと云ふのですよ。」

「成程、實は己れも其ことは先刻から考へて居たのだ、多美江さんは何う思ふわ。」

「妾し、何だか最う倦きた様ですわ」

「ハ、ア吉野山の櫻かね、危い〜……。」

「何ですつて貴郎！あゝさうですかお止しなさいよ擲揄ふのは——

「此の湯本に恚うしてゐるのが倦きた様な氣がすると申しましたの

ですよ。

「それで己れも先づ安心、全然で商船で獨逸の軍艦に見付かつた時の様な氣がしたよ——ア—アツ」

「アハ、……」

「オホ、ツ……」

「……」

「……」

「多美江さん。」

「ハイ。」

「己れは戯談は云はんせ。」

「妾だつてそうですわ。」

「でも。」

「い、貴郎がお天氣にして仕舞つたのですもの、無理ですわ……」

「然うか、實際己れが悪るかつた。此の鐵夫が誤解したのであつた。平に謹んで鐵夫は今改めて多美江様にお詫びいたしま……」

「いえ止めて頂戴よ、そんなこと。」

「然う、これでは又前言に矛盾することになるな、さうだ今戯談は云はぬと云つたつけ……それはさうと事實己れも最う倦きたから何うだね多美江さん何處かへ一つ轉地としやうか。」

「エッ轉地ですと、病……」

『いやさ天飛仕様と云ふのだよ。』

『さう、飛行家の様です。』

『然うだ、着木だつた、今少しで飛んだ男になり相だつたよ、ア、着木々々、危なかつた。』

兩人はそれから種々と考へたり相談したりした。處で此處から登つて蘆の湖畔に行つた處で、まだ六月上旬だのにそんな爺さんや婆さんじみたことも滿らない、と云つて熱海に行つたとてた、海岸と云ふだけのこと、さうかと云つて山を越えて修善寺方面へ赴いても矢張此處以上俗な湯治場であつて却つて自然美などは少いから興が無い。扱は何うしたものかと、鐵魂の様な此の鐵夫様と、美々し

い多美江さんの兩人が、有りつただけの智慧を絞つて、絞りぬいて最う一滴も無いかと思ふ一刹那、

『何うだね東の方は。』

と己れの口から言葉が飛び出したので、

『さうねー』と云つて多美江も頭を傾けた。

『近くは大磯また鎌倉か、でなかつたら三浦三崎から房總の地方を九十九里が濱に遊ぶのも妙だらう、何んなら北米に走つても良い、が然うは行くまいからそれは取消しとして、少し北になるが日光から奥州仙臺その先の松島邊りに遊んでも良からうと思ふが何うですな。』

「オホ、ツ……— 貴郎随分お口まめですこと、妾は何も最う考へは盡きたところなんでした、では直ぐ様貴郎の面白相な口車に乗つて出かける事に致しませう。」

「よし、絶対的賛成か、何だか黍團子でも持つて居相だね、ハハッ。」

「一とつ下さいお供をする、ですがオホ……」

忽ちにして全部可決、それなら善は急げと云ふので多美江は火急で、電鈴を押して女中を呼ぶ、己れは汽車の時間表を取出して國府津からの東行列車を調べた結果、今直ぐ出て行けばまだ十一時の汽車に間に會ふと云ふのでそれも即時提出と共に可決、女中さんまで

が常に無く飛び廻ると云ふ次第、其中に俾も三人來たと云つて來る。間違つて一人多く來たのを幸ひ荷物はセツセと一台の俾に積んで兩人は身のまゝの輕勇み十五圓幾許と云ふ證が來たので淺間山の噴火口へ飛込んだ氣だらうが何んだらうがお構ひ無し、十圓札二枚と云ふ大枚を投出して釣銭はいゝなど、變な處で氣前を見せて、轉び墜ちる様に階段を降りて、光線の様な速力で玄關に飛ばして、ハイサ、ナラだけは云つたが何うか、フィルムの映す曲藝以上速かに兩人は俾上に飛上つたのであつた。

五 お里が近い。

「多美江さん。」

「ハイ。」

「浪の音は何うですね、己れは此の波浪の音許りは何だか一寸恐ろしい様に思へてならんがね。」

「あらさう——妾もさうした気分が何時もく波浪の音を耳にする
と浮んで來ますのよ——然しね妾には一種の懐かし味も感じられ
ましてよ。」

「成程、然うある筈ですな、詰りそれが人間の自然と離れることの
出來ない因縁の結ばれてゐることなんでせう。」

「では妾が海岸の育ちで、貴郎が山地のお育ちだからと云ふのです

か？」

「マア一寸そんなものですね。」

「貴郎。」

「なに。」

「月が今雲間から出ますのよ、雲を離れて光を海水に投げてゐる時
は貴郎もお好きぢやなくつて？」

「それは己れも好きさ。」

見るく月は笑つて雲間を抜け切らうとしてゐる。波濤の音は何
處から共無く風に連れて高く低く、その永遠の響を傳へてゐる。

兩人はいま夜の海岸を歩いてゐるのである。

「多美江さん、疲勞は良く治りましたか。」

「ハイ最う皆去つた様ですわ。けれどね、時偶まだ汽車に乗つてゐる様な感じのすることもあるつてよ……」

「汽車では多美江さんは弱虫ですね。」

「エ、さうです、それと云ふのも妾まだ遠路を乗つたことが無いからなのでせう。妾以前東京へ往復する時はね、何時も行きにも歸りにも、屹度千葉の伯父の家で、一晩位泊つては行つたのですもの、ですから、ものゝ二十里と續けて乗つたことはありませんのですから。」

「それにしてもさ、國府津から此處まで幾許ありますね、先づ五十

里なんど有りますまい。」

「それはさうですよ——ですがね最早此の後は大丈夫よ。」

「何うして？」

「でも妾、今度旅に出てからは全然貴郎に同化して随分お天羽にも成り快活にもなりましたもの、今度は西比利亚鐵道を乗通しでも構ひませんわ。」

「これは恐れ入つたね、實際驚かざるを得ずだ。」

「貴郎、妾ね、今シベリヤ鐵道から思ひ出しましたが、彼のロシヤでしたか佛蘭西でしたか、詩人が海を唱つた非常に好い詩がありましたでしたね。」

「それが何うした。」

「いえ何うもありませんが、ホラ貴郎がまだ私立大學にゐた當時譯したでせう？そしてそれを讀んだ妾が、計らずも貴郎と此の海岸でお逢ひして。」

憊う云つた多美江は一寸微笑んだ。それが月の光りで己れの視覺に映つたとき、己れも思はずニツコリした。

と云ふのは三年前のある夏の日の夕發生した、己れと多美江とが今斯うして旅行までしてゐるそもくの原因、即ち兩人の初戀の當時を思ひ出したからであつた。それは暖い或日のことであつた。同行の友は三人共水浴に出た其留守で、己れ一人少し氣分が悪くから

宿の二階で寢轉んで、何を思ふとも無く考へるとも無く、開け放たれた窓から吹入る鹽風に吹かれて居ると、

「モシ、御客さん、御客さまが見へました。」

ヒヨット見ると、女中君敷居の處に掌を衝いて居る。

「何んな人です」と云ふと、

「女の御方です」と女中は云ふ。

「女？ 眞個うかね——僕等の處へ女が來る筈はないぢや無いか。」

「いえ、實際なんです。」

己れは首を傾けて、ウン考へて見ると、思ひ當ることがあつたので、

「ウム、イヤあつたかも知れ無い。兎に角僕等の様な若い男、而かも恰度一人の處へ女を迎へるなア一寸物騒だから、良く聞いて来て呉れ給へ何と云ふ名の人で、誰れを訪ねて来たのだから」と云ふと、

「左様で御座いますか。」

と云つて女中は降りて行つたが、間もなく又行つて来て、

「多美江さんとお仰る隣村のお方ださうです、山田さんがお在宅で無くても槻川さんにお目に懸り度ひとお仰いました」と云ふ。

「ナニ、我輩が一人で居たことを君は云つて了つたんだナ」と云つて見たが間に合はない。

「ぢやア仕方が無い、我輩女は大嫌ひだけれど止むを得んから案内してくれ。」

と云ふと、女中君微笑ひながら立つて行つた。其處へ案内されて行つて来たのが、今では己れの新妻である多美江さんそのものであつた。

十七歳の多美江さんは、素敵に美人だつた。それを見た己れの精神は急に活氣が付いて来た。今までの心持の不快と淋しみとは何處へやら、兩人は頻りに氣が會ふので話しに身が入つたのであつた。

多美江さんは遂に己れを初めて見た時の心持まで語つた。己れも山田君に連れられて君の伯母の家だと云ふ多美江さんの家に行つた時

の心持なども思ひまはして見たり、又語つても見たのだつた。

其頃千葉の女學校に居た多美江さんが、己れが拙劣くそに譯して或雜誌に出した「永遠の響」と云ふ新體詩を見て、大變に氣に入つたと云つて其時話し出したので、兩人の話はそれから特に深入りしたのであつた。

恁んなことを互ひに想ひ浮べたので、遂さうしたニツコリの一對を演出したのであつた。

月は雲間を離れて笑つてゐる。その光は波浪に碎けて、黄金の濤となり、錦腸の浪となり、白銀の波となつて海の神秘を飾つてゐる。兩人は云ひ合せた様に暫時沈黙を守つてゐた。

濟まないけれど己れは此の場所だけは委細しく語らない。たゞ上總の東海岸であることだけは告白しておく、風景も此の上間は無いでくれ給へ。餘り語つて了ふと解るから。解つても好いが、其處は己れの大事なく、新妻の多美江さんが育まれた、父や母も今尙お在しまする「お里が近い」のだから。

六 ハイ左様なら

其晩兩人は遅くまで語り合つてゐた。ファストラブの當時を追想して甘い感觸を味ひ乍ら宿へ歸つた時は既に十時過ぎであつた。若い男女が夕方宿を出たきりで何時まで経つても歸つて來ず、餘りの

ことゝ其家の人々は近所の男三人まで頼んで、彼方此方と探し廻ると漸く見付かつたので、伴れ歸らうと思つて手を曳き出して見ると二人の身體が男の兵兒帯で縛りつけて袖の中には男女共一ぱいに重く小石が入れられてあつた。良く見ると、男女共全然泣き明して目が腫れ上つて居たと云ふ情死未遂の噂で名高い里だけに、宿のものは尠ならず心配してゐたことであつた。それを聞いて私たちは宿の人は勿論のこと他の座敷に居る人々にまで、濟まなかつた様な氣がしたり、又きまりが悪い様な氣分がして、其夜は便所へ行くさへも、三度行くところは一度で濟まし度い程に思はれた。それで無くつてさへも兩人の精神は餘り此處へ來てから自由な天地の氣分

61
 ではなかつた。何故と云ふに、二等をなどゝ振つてゐては面白くもちつとも無いからと云ふので三等へ乗つて出て行くと、汽車の中では此方が大失敗、大笑ひや小笑ひは先方のもので堪まらず飛出して、これはいかんとも何とも思はず今度は湯本一流の温泉旅館名さへ箱根をそのままの函谷館に投じて見るとこれはしたり、餘りにも高尚すぎてまるで宮様の若様かお姫様の様な取扱ひ、これでは如何にと喋々つて見たが獲物は只の女中さんの身の上話し、それすら味も素氣も無い眞面目のくゞ只のお話し、エイこんな事かと今度は此方で演る番かなと、頸を傾け智恵を絞つて行つた結果はお湯で上氣せた一時的の狂さん程も無い疲勞儲けに終つたので、甘い以前の味でも

と、此處へ来て見ると思つたよりは又大狂ひ、反つて氣儘も出來ず縮んでゐたのであつたものを、これでは又々相談の相談に係ら無い譯には行かなかつた。然し時計を見ると最う十二時に五分前だ。下座敷も何處の座敷も全然り肅然まり返つて人聲一つし無い、ポー、ドーと云ふ波浪の音許りが凄まじく響いてゐる。先きまで一寸聞えてゐた直ぐ先きの萬物屋の犬さへ今は聲もたてゝゐない。窓外を見ると五六軒先きの海濱亭の瓦斯燈が淋し相に細い光を流してゐる其左の方の一室で、女の體が障子に映つて見えてゐる許り、電燈の無い田舎町の深夜は、恰度アフリカの大森林の中の様に淋し相だ。これでは寢るより外は無いと、遂々相談は明日のこととして、只種々

と語り合つて居た許りで床の中へモグリ込んだのであつた。

『オヤツ、多美江さん地金が出さうですせ。』

『何ですか？』

『これが解らんとは一寸變んだね、お里の近い此處へ来てさ、おーかーほーが。』

『アラソウ、妾の顔が黒くなりましたのですか。』

『勿論だよ。』

『何が勿論なんですせね。』

『實際勿論——論が勿い……と云ふのだからマア鏡を見給へ。』
 火急て、新妻君は懷中鏡を取出して顔を映したが、

「ほんとですわねえ、困りましたわ。」

「困ることは無いさ、鹽風の吹かない、日の輝らない國へでも行けば直ぐ治るぢやないか、己れが付いてるから心配するなよ。」

「又冷評さないで頂戴よ。其貴方が付いておるでになりながら此んなに成つたのですもの、ほんとに妾し何う仕ませう。」と大分悲し
想な顔をして見せる。

「イヤ心配するなよ又世界的な白粉で左官すれば大丈夫だ。」

「ソウね。」とそれはそれ切りになつて了つたが、今度は第二の問題が又持上つた。と云ふのは前夜の一件だつた。此の邊は大層口輕い土地だから何んな評判が起つかしれ無い、せめて妾の名前だけでも

偽名か何かにして置いたならば何處のたれだか大方解りはしなかつたから良かつたがと云ふのは多美江さんの泣言兼後悔兼主張なんだ。聞いて見ると無理も無い。以前の袖へ石を入れた男女の話しなども僅かのことから誇張されて彼んな話しになつたのらしいのだが、吾々のことだつて或は死にそねた位に噂されるかも不明ら無いのだ。實際困つたことをしたと後悔して見たもの、詮方が無いので、何でも人の噂は七十五日と云ふから、一日も早く其七十五日が過ぎ去る様に、一時も早く此處を出發と云ふことになつた。で夜前初めて置いた相談が早速持上げられる。

「貴郎日光は。」

「日光は栃木縣下野國に在つて徳川家康を祭つた東照宮のあるので名高い。」

「あらそう——妾豊臣秀吉を祀つてあるのとはばかり思つてゐてよ、オホ、。」

「ハ、ツ……」

「それは扱置き日光は良き相ぢやな——結構と云ふのは日光を見てからと云ふが今吾々兩人は其結構と云ふ場合だからね。」

「では行つて下さる。」

「行かう。」

今度の相談は忽ちまとまつて了つた。湯本で絞り抜いて来た兩人

の智恵の中には殆んど絞る餘地が無かつたかも知れない。何せよ決定て了つたのだ。決めた事は太陽様が北の方から出ても破らぬと云ふ關東人の二人は後でと云ふことが首を切られるより嫌ひなのでもあるから此處で又直ぐに出發と云ふことに議決して了つた。宿へ告げるとヒロインが上つて来て「夜前私たちが餘計な心配したのでお氣にさわつたのでは無いでせうか」と心配相に訊かれた、然うでないと云つて歸してやつたが實は出發の原因として五割位はそれが這入つてゐたのだ。間もなく女中さんは書出を持つて来て、

「お出發で御座いますか。」と云ふ。

兩人とも口を揃へて、

「ハイ左様なら……」

七 日光より

兩國停車場に兩人が降りた時はまだ其日の午であつた。驛近い西洋料理店で午食を済すと忽ち俾で上野に向つた。乗替が厄介だからと云ふので業と市内を人俾で通過することにしたのであつた。暑い日の汗を流して荷車を曳いて行く人や、倦怠相に歩んでゐる街道の人々は氣の毒に思はれた。隅田川を渡る時小舟に遊んでゐた兒供は曇つた日だけにそれ許りは樂し想に見えるのであつた。

上野からは都合良く汽車に乗れた。東武の平原を走る列車は風を

切つて快く室内の空氣を交代させる。連なり續く水田は大方早苗が植付けられて美事であつた。白い手拭か菅笠を冠つた田舎乙女の腰巻は軽い風に動いてゐる。鶏鳥の啼音は停車場毎に傳へて人々の心持を延閑とさせるのであつた。

幾度か擦れ違つて行く列車の中には、可なり状々の乗客が見えたが、兩人が乗つた日光行くには、比較的揃つた客が居た。そして少なくとも神詣と云ふ心持ちの人々が多かつたのであらうか、スマシやさんの多いのは殆んど單調すぎる位に思はせるのであつた。

多美江は地圖と眺望とを見比べては時折地名山名などを己れに尋ねるくらゐのこと。己れはまた過去數年間の旅の思出から日光に就

いての歴史などの聯想を重ね乍ら、例の通りたゞ貰ばかりふかしてゐたのである。

曠い平野を去つて汽車は次第に高峰の麓に向つて走つた。既に山に突入るかと思ふ時列車の進行は緩んで間もなく停車る。其處は目的の日光驛であつた。驛を出ると少しの間老杉の繁る並樹道があつて、眞直な緩い登り路は忽ち街の中に入るのであつた。

兩人は中流と思ふとある旅館の前に俾を降りた。

其夜の八時頃であつた。兩人は名物の羊羹に舌鼓を打ち乍ら話し合つてゐると、

「貴郎。」改まつた句調で多美江が云つたので己れも思はず驚いた様

な調子で、

「何ごとですな。」と云つた。

「いえ別なことでもありませんが……貴郎最早う彼のことはお氣にかゝらなくつて。」

「何に—あゝ昨夜のことか？」

「さうですッ。」

「構はんさ、然し、ちつとは構へるな、己れだけのことは何とも思はんが多美江さんのお里が近かつたのだから……。」

「そうですか、最う今頃は噂が噂を生んで女は多美江さんと云ふ人だつたなど、云つては居りますまいか——妾考へて見ると餘程弱

いのねえ。」

「神経過敏だね、噂など構ふことは無いぢやないか。」

「でも何だか妾に氣になつてよ。」

「時偶噴き出す氣焔は豪氣なものだが女は弱いものだね……」

「……………」

「アツ、多美江さん斯うしては何うだね。」

「何うするのですか？」

「それは慙うだよ、成程考へて見ると田舎の人なんて一寸のことに
も大騒ぎを行るものだから、實際噂が生れて行つて、多美江さん
の父さんや母さんが心配する様なことなどが無いとも限るまいか

ら、手紙を書いて送つたら良いぢや無いか、私たちは今日光に來
てゐますから心配しないで下さいつて。」

「オ、眞個ですねえさうしませうよ、だげど兩人の名前で送る様に
貴郎が書いて下さらなくつて——」

「さア——多美江さん一人で好いぢやないかね？」

「何ですから。」

「第一ホラ候候と云ふ手紙を書く老人に向つて、己れの書いた様な
文章ぢや向くまい。吾々としては暑い夏の日などに謹んで一筆啓
上仕り候、然し乍ら云々何々にて候、恐惶謹言などいふ手紙
を送られると實際恐惶だからね、従つて年に一度も候文の手紙な

どは書くこともないから勢ひ文章もまづい譯、さうなるご己れの男を下げて了ふのは構はないけれど多美江さんの信用にも關して來るからね、一寸考へものだと思ふが何うだらう。』

『いゝえ、眞逆にそんな心配なんかありませんよ。妾の父さんもそれ程開けない方ではなくつてよ。』

『ハ、アさうかね、それとすれば書いても良いさ。書いて送つて兎に角心配を出来るだけなくして此の新婚旅行を珍なものに行りませう。』

『では眞個に書いて下さる。』

それから愈々書くことにした。書き上げた手紙の文は次ぎの様で

あつた。

父上様母上様謹んで此の日光から差上げます。

日光より謹んで一筆啓上仕り候と云ふところですが、御承知の通り、候文などは年に一度か二度と云つた風なので、私たちには六ヶ敷い様でもあり、肩が凝る様でもありいたしますので只今兩人して相談の上書き良い斯うした言文一致の書面を差上げることにいたしましたから、何うか其邊を御了承の上御讀み下さいませ。

實は此の手紙を送ります兩人共一寸心配の結果筆を把ることになりましたのです。斯う申上げましたなら、或は反つて御兩親

様に御心配をかけるのではあるまいかとも存せられますが、何うぞ御休心下さい。若し昨今御地方で、鐵夫と云ふ男と多美江と云ふ女とが、上總の海へ云々と云ふ噂さが起つては居りますまいか私たちは本日此の日光へ参りましたのですが今朝までは御地の隣村の例の海水浴地の旅館に居りましたのでした。で今日から數へますれば二日前のその夜、兩人は月夜の海岸を散策して居りますと、以前の思出が頻りに浮んで、遂私たちの足は或る松の樹の間に留まつたのでした。一寸申悪くうありますが、兩人は其處で遂甘い味の二人許りの以前の話しに語り更けつゝ、遂に時の過ぎたのも知らず、氣が

付いたのは十時、急いで宿へ歸つて見ると、宿の人たちは大變な心配、御承知の若い男女の袖の石と云ふのではなからうかと大騒ぎでありましたのでしたとか。就きましては、戸の閉たない人の口から何んな噂が噂を生んで、父上様や母上様の御耳に達して、とんだ御配慮を煩す様のことの無きにしもあらずと思はれまして、此の書を書き送ることにはいたしましたのです。云ふまでもなく噂は噂、事實は事實でありますゆへ、此の書面に依つて御安心下さいませ。

あゝ今は既に夜の十時、御兩親様には若しや噂の偽りの爲めに御心配の餘り、夢幻の悲しみを爲されつゝあるのではありま

すまいか、——然し私たちは此のことの爲めに後に反て世の人
人に名を知られ不幸が變じて幸福となるそれではなからうかと
疑つて居りますが、此の手紙を御讀み下さる時は、御兩親様に
も御嬉び下さる御こと、信じて居ります。

御兩親様其他皆々様の御多幸を祈りつゝ、頓首

六月十二日

日光にて

鐵夫
多美江

御父上様
御母上様

書き終つたのは十時半であつた。封筒に入れて表書を書いて居つ
た時、女中が来て、

「御客様、御床はいかゞで御座いませう——」

八 それは危険だ

「や難有う……姉さん今のは直ぐに出してくれ給へ。」
男は女中の差出すステッキを手に取ると伴れの女の方を振り返つ
て見る。

「貴郎——では参りませう。」
女は男に云ふ。

「直ぐにお出しいたします、何うぞ御ゆるり行つていらつしやませ。」

「いつていらつしやいませ。」

「行つてらつしやいませ。」

若い男女の客人は静かに鉢石町を上つて行く、二人の女中は直ぐに街を下手の方へ急ぐのであつた。

女中が再び宿に戻つたとき、

「お花さん、何處へ行つてきたの？」

他の一人が訊ねた。

「妾、郵便出しによ。」

「お花さんの？」

「いゝえ。」

「陰さなくてもいゝは、彼の方へでせう。」

「戯語でせう、妾そんな人ありませんよ。」

すると、店の方から、

「皆が早く行つてお了ひよ、何してゐるんです、朝つばらからおのろけなんか云つて御茶菓子でも澤山お買ひなさいよ、さうすれば遊んでゐても良いから。」

と云ふ三十女の聲がした。

「だつてお花さんはまだお掃除も形付けないで何處かへ行つてるん

ですもの、妾今もう掃き出してあると思つて三番の廊下を拭て氣が付いて見るとまだ掃いてはなかつたんですもの。』

此の時二人の傍へ来た三十女が、

『お花さん何うしてそんなことをするの、形付けてからにすれば良いのに。』と云ふ。

『でも妾お客さんがね、大急ぎで出して下さいつて云ふから出しに行つて来たんですわ。』

『さうならさうと云つて行つたら良いのにねえ。』と云つて三十女は小首を傾けて又、

『いまの七番のお客さんの。』と意味あり氣、

『エ、さうなのよ。』

『さう……彼の夜前ヒソ／＼何だか話し乍ら長い手紙を書いてゐたと云ふのは七番でしたね。』

『エ、さうでしたよ。』

『一寸變でしたねえ、一體何うしたんですしたでせう?』三人は替る替る云つた。

『これは何んでせう。』

と云つて雑巾を手にした女中が半分に切れてゐる様を出したので三十女の姉が讀まうとするとき通りかゝつた主人公が、

『何だ己れに見せろ、今聞いてゐると一寸怪しい様な話しぢやない

か？」

と云ひ乍らそれを手にして讀んで見て、

「イヤこれは下手すると迷惑する事が出来るかも知れん、誰かすぐに署へ電話をかけて来て貰つて早く相談した方が良いだらう。」

と忽ち大騒ぎの活劇が演出された。警察からは部長と刑事とが自轉車で飛ばしてくる、荷物の中の一寸見られるものは見ろと云ふ、委細の様子を聞いてまた座敷の内外から所持品等を見てゐた刑事と部長とが忽ち、

「最う何の邊へ行つたらう。」と云ふ。

「左様ですまだ神橋を越えて二三丁位でですか。」と主人公は答へ

た。

「何うも怪しい。」

「それは危険だ。」

刑事は急いで自轉車に飛び乗ると見る間に、上手に走るのであつた。

九 曲線美だよ

兩人は大谷川の岸に歩みを止めた。

「多美江さん繪の様でせう。」

「全くですね。」

「然し繪としては少しどくくしい氣味があるね、彼の山、此の河などの背景が實にさうぢやないかね——」

「然うですねえ——熾んをシンボルする山峯で狂暴をヒントしてゐる河流ですことねえ。」

「冬は又何うだらう、寂寞を代表する嶺や山の間を橋の珠色が枯れた流れに映つたなど宛然荒さんだ血管を走り廻る血の様ぢやあるまいか……極から極へ走る此の日光の自然へ人工するとは徳川てふ男子も、餘程長い夢物語りの好きな奴だつたと見えるぢやないか、これだから死に場所として日光を人が選ぶのだらうよ。」

「ホ、ツ、貴郎のお言葉は何時も面白いのね、だけど他人様がさ、

ますと……」

此の時自轉車で飛ばして來た商人體の男は兩人の近くに軽く降りて兩人の方に歩み寄る。

己れは知人でもあらうかと男を見返つたとき、男は口を開いた。

「若し貴下は槻川鐵夫さんと仰有るお方ではありませんか？」

と云はれた時何うも知つた方でないと思つたので一寸答へを躊躇してゐると男は聲を細くして、

「遂申遅れましたが私は日光警察在勤の刑事東田と申す者ですが……」

……又御姉人の貴女は多美江さんと仰有るお方で御座いますまいか、違ひましたなら御免を願ひます。」

「成程、然うですか、槻川鐵夫同多美江の兩人です。」

云はれて己れは天下晴れての新婚旅行と云ふ以上に暗いこと、云つたら日中の電燈程もないのだから「これは何かの間違ひだ」つと想つたので直ぐに明白と答へた。

「一寸署まで御同行を願ひ度ひのですが……」

兩人の足の先きから頭の上まで睨りながら刑事君は己れの豫想通り云つた。己れは何だか滑稽な感じが起つたので、

「さうですか、然し——」笑ひ乍ら答へて多美江を見返つた。すると、

「貴郎行く必要なんで無いでせう？」

多美江は云ふ。すると刑事君は、

「然し——是非共御同行を願はんければなりません。」と今度は力のある聲を出した。

「然うですか、だが君吾々は怪しくも危険でも無い人間だよ、寧ろ一寸御安く無い方かと思ふがねハ、ツ……」

「それは或は相かも知れませんが——」

「事實それなんだからマア君構ひ給ふな、だが君理由は何うなんです？」

「理由は此處で申上げることには出来ません、職務上からとしても困るからね。」

『成程、然し君の達観としても敢て吾々が怪しかる人物で無いことはお明瞭りでせうからマア署へ行くことは止めさせて呉れ給へ。』
 『それは成程神ならぬ身のまして平凡な此の東田ですから貴方が何う云ふお方が解りませんが——然し貴下方は相當教育も御受けなされたお方と見受けますから私たちの職掌柄に同情されて是非一寸同行していたいき度いですな。』

『いや謙遜して持ち上げて同情を乞ふと云ふお言葉には恐縮ですなア、實際それは君等としては困るのは困るだらう……』
 『己れは憚んなことを云つて今度は多美江に、』

『多美江さん何う仕ませう……』と云つて視ると、

『ソウ、妾何うでもいゝわ、何も暗いことなんつて無いんですもの……』とは云つたが一寸六ヶ敷い顔をして見せる。

折から此の有様を見て一人二人宛足を止める人達は、次第に多くなつて三人の圍りに人柵を築くのであつた。

『君たちよ此處は見せ物では無いことは解るでせう除きなさいお行きなさい——』

と刑事君は邊りの人々に注意を與へて、

『何うか一寸ですから行つて下さい……』と云ふ。

『多美江さんこれも書くことの一とつにする様に行つて見様ぢや無いかね——止んを得んから。』己れは云つた。

「エ、然ういたしませう。」

「……………」

「……………」

「聽て三人は人垣を貫けて警察署へと向つて歩むのであつた。」

「人垣は崩れる様に散り初めた。」

「何ですな、今のは？」

通りかゝりの一人が聞く。

「さア何ですかね、悪るものぢや無い様だが……………」甲

「東田が馬鹿に丁寧だつたぢやないか。」乙

「人品も良かった。」

此の時人たちの中から、

「いや、これだ、お前とならば何處までも。」と云ふものがある、

「さうだ、屹度さうだよ、」と云ふ聲も起つた、「お安くないね……………」

「ハ、ツ、」

など、云ふ聲が入り亂れて飛ぶ、

「お前とならば何處までも厭やせぬ、構やせぬ、日光の華巖の瀧の中までも……………」

見ると風呂敷包を背負つた十五六の小僧がいま橋の方へ歌ひ乍ら行くのであつた。

己れと多美江とは斯うして遂どう日光警察へ曳かれたのさ、然し

東京を始め出た時分でもあつたなら、先生少しは面喰つたか知れなかつたが、此の時には最うすつかり卒業生の面目を發揮してね、署長の前で愛嬌たつぷりのお惚氣の氣焔千萬丈當る可からずさ、宛然極樂山が噴火して惚氣瓦斯が地球を取巻いた時の様さ、日誌なども口をきいて、忽ち事情が解つたので『これでは紙片に父上様母上様謹んで……など、書いてあつても、うつかり警察眼で許り讀めないぞ』など、先きの東田刑事などが云ひ出して大笑ひさ、署長なども遂とう口をハンカチーフで拭き乍ら『お羨しう御座いますなア』など、ニツコリ笑つて見せる。

『時に失禮ですが御職業は何ですか？』

と一方で云ひ出した奴があるから、答へ様とする刑事を遮つて、

『五割著述です。』と云つてやると、また、

『五割は何ですな？』ときく

『五割はマア遊びですよ、仕事が無いのですから仕方が無いんだ、だから斯う云ふ新婚旅行なんか毎年でも行つて見度いと金さへあれば思つてゐるのですがね、いま迄にも十回許りは行りましたが實はそれは新婚で無く眞困、または貧困旅行でしたからねえハ、ツ／＼ハ、ハ、ハ、ハッ。』

『ハ、ツ……』

『フ、ツ／＼。』

「……………」

此の間己れがチョコ／＼多美江を見ると多美江さんはたい紅い顔をしてニコ／＼してゐた。

愈兩人が辭さうとすると、東田君と部長とは入口の處まで送り出して来て、

「いやとんだ手間取らせましたねえ。」「御ゆるりと……………」と云ふ己れは直ぐに云つた。

「反て幸ひでした。曲線美だよ……………」

其晩己れは思出の多い會津行きを提議して多美江さんの賛成を求めた。

一〇 車窓ロマンス

「貴君方はどこへお出でだし？」

「ハッ私たちですか、國へ歸るのです。」

傍の男に突然問はれたとき、己れの軽い口からは遂こんな返辭が出たのであつた。

「然うかし、お國は何處だし、近いかし？」

「國は會津ですがね……………然し故郷と云ふ程でも無いのですがね……………」

「然うかし、會津だつてなかくひろいが會津の何處だし。」

「エ、若松の少し南なんです。」

「へエさうかし、それぢやア蘆牧の近所でもあるかし。」

「さうです蘆牧の温泉から近い處です。」

「なるほどね、それぢや蘆の牧の人の東山温泉の出來ごとを知りま
したかし……」

「遂それは知りません、何かなんですか、大事件でもありましたか
ね、私たちは遂年に一度も行つたり行かなかつたりで、碌々知ら
ないのですが——」

「然うかしそりやあ、俺ア彼地から少しまだ南の方だがね、大
邊な評判で、會津中知らねへ者は無いちう様な話だし、若い兩
人のことなんだがね、ソウく、ホラ蘆牧の佐平さんの家を知つた

かし……」

「さア一寸解りませんなア。」

「へッ。——佐平さんの家知らねえかし。ぢア……」

男は恚う云つて、詰め込んでふかし詰め込んで吹かし乍ら話し
てゐた重さうな銀の煙管をそばへ置いて私の顔を皮がむけるかと思
ふ程見つめる。己れは此の時まで實を云ふとハラ／＼してゐたのだ
つた。一寸位は會津地方を知つてゐるから、大抵差支へもあるま
い、相手が會津言葉であるのを見てこれなら何でも汽車の中などで
は成可く調子を合はせるのが面白いからと思つて、遂調子を合はせ
て行つてゐるととんだことに成つて了つたので、傍に居る多美江は

度々己れにシガールの火を點けて呉れ乍らびよんな目付きで知らせる様なことなどして止めて〜と云はぬ許りだつたんだけど、構はずに話し込んでゐたが遂とう口軽るな己れも危な相に成つて來たと感付いたから、

「伯父さん、私は濟みませんでした」と云つて見たすると、男は云ふ。

「何だし。」

「實は私は會津の一部は大方存じては居りますが、古郷と云つたのは、真青な偽語なんです。」

「へ、ツハ、お若への出かした〜、真青な偽語たアこれは面白い、

真紅な偽語だつたら、俺れも一とつ真紅になつて怒り出して掴み會ひでも何でも仕様と思つてね、それにしても煙管は危ねえから手から離してさ、お前さんの顔を見詰めたのだつたし、だが真青な偽語ぢやア、此方が真青になつちもふ、出かした〜、ハ、ツハ、ツ……」

「ハ、ツ。」

「伯父さんさうかし、己れは實は九州だし、いま伯父さんに睨まれた時は、己れは己れの顔の皮がむけやしねえかと思つた。」

己れは遂興が乗つて男の真似まで始めて了つた。

「イヨ——出た〜い、蓉峯おつとどつこい曾我廼家十四郎、おら

も遂うからさうだつべえたア思つていたが、まるきり僞語でも
あんめえと思つたら此いつア一ばん喰つたぞ、ハ、ツ〜。』

『ヤアうまい〜。』

『ハ、ツ〜。』

『千兩〜。』

『ハ、ツ。』『ホ、ツ。』

車中は忽ち大變な騒動になつて了つた。己れは其時ちつとも耻か
しく無かつたが流石は女だ。多美江は遂どう金時の先祖様の様な顔
をして風呂敷の様な白い布でお顔を陰して了つてゐた。それにも構
はず己れはまた喋語り續けた。

『伯父さん然うでがんすかむし、これぢア、皆な面白くつて〜笑
ひ出したでがんすがこりやア伯父さんを地獄で八幡さまに逢つた
よりうれしくつてでかんすなア……ハ、ツ。』

『さうだなも、尤もなも、あんたアそれぢや神功皇后さま位ゐだな
も、ハ、ツ。』

『ハ、ツ。』『ホ、ツ。』

『さうづらか、それはうそづら尾張づら……ハ、ツ』

『叶ひません〜、おはりづらと云はれちやお了ひにしてしませ
う、九州だと云ふから關東になれば、秩父の莊司畠山重忠の勢ひ
で攻め込まれた、逃げて名古屋地方に落延たと思つたら忽ち今度

は武田信玄が駿河から追付いちア、遠々三河も長篠と危ねえ様で
すからお仰る通り尾張として、言葉の將棋は此方が負けで止めま
せう、此上逃れても日本の中より仕方が無いが、お若い方は英語
とやら、何故にそなたはフランスか例へギリシヤが有らうとも床
をトルコの一とつ宿など、今夜の宿屋までも追ひかけられると大
變くイヤ何うも失禮いたしました、ハ、ハ。」

「イヤ恐れ入りました、流石は龜の甲より年の効です、若い癖に出
車張つて私こそ失禮いたしました。」

男は煙管を握る、己れは巻蓑に火を點けて互ひに改まると、

「何うも御苦勞様でした。」

「大層面白う御座いました……」

幾人かの同時に云ふ聲が隣り近所から入亂れて私たちの處へ流れ
て來た。

汽車は此の時那須野原頭を貫けて白河驛に入る處であつた。

男は其後先きに一寸口走つて會津蘆牧の出來ごとは其地方で有名
な豪農の一人娘が、昨年の五月節句に東山温泉に母と二人で行つた
ところが、宿の二階で話し會つて居た娘が一寸小用に行つて來ると
母に言つて階下に降りた切り何時まで經つても來ず、忽ち大騒ぎと
成つて何百人と云ふ人で探し廻つたが遂見付からなかつた。ところが
が此處に斯う云ふ話がある。

恰度其の日の夕方猪苗代湖畔の或人が湖水の岸に遊んでゐると、非常に美しい妙齡の婦人が傍へ来てニツコリ笑つたかと思ふとパツと其美人は飛び上つて消えて了つた。扱不思議なことがあるものだと思つて考へて居ると三四丁と思ふ湖水の中の方で、激しい音がしたので見るとその水の表面に、差渡し十間もあると思はれる大きい穴が明いてそれが暫らく消えなかつたと云ふのと又一つは、

其の娘には兼々情夫が通つて来て居たのだが其の情夫と云ふ男の身元が河沼郡の柳津なので其處へ照會して見ると恰度其の頃から家出して行衛不明だと云ふ。それでは情夫と人目を避けて驅落ちしたのだと云ふ人と、いやそれなら、其日の中からの大騒ぎであつたの

だからたれか見るとか、又それらしい人を見た人が會津の中か又は郡川須賀川白川、乃至は日光の方面、でなかつたなら越後口、北ならば米津方面で誰か一人や二人は見無い筈は無いからこれは何でも猪苗代湖の主が假に人間になつてゐたのだらう、第一非常な別嬪だつたからと云つて大評判だと云ふことを尙委しく話されたのであつた。

「で私は越前の商人ですが、會津には春秋二度は毎年一十數年來通つてゐるので、昨年の秋行つたとき、彼方此方で聞いたのであつた。」

と最後に付加へて話されたのであつた。

己れは嘗て會津地方に遊んだことがあつて、蘆の牧に、まゝ柳津にも思出を持つてゐるだけに、特に興味ある問題として飯より忘れぬ葺さへもともすると忘れる位に熱心に耳傾けて聞入つたのであつた。多美江も又同じ様に面白氣に終始聞けば、邊り近所の乗客も、頸を延し、手を耳に當て、聞入る人々もあるのであつた。

その日私たちは其男と共に郡山から乗り替へて夜にかけて岩越線上の旅を續けたのであつた。

一一 おごつて頂戴

「多美江さん明日その方を見せて上げませうかね。」

「そう——是非見せて頂戴な。」

「だが見せてね反つて君に心配を起させる様なことがあつては困るが……と己れは心配してゐるのだがそれは差支へ無いかね。」

「何ですつて？ 妾はそれ程野暮で無いのよ、それ程貴郎を信用せないのなら今までかうして苦心もしません、また妾結婚などしやしませんわ……」

「なるほどね、それで先づ安心した。それならば明日は、早速見せて上げ様、それはくく素敵なものですせ、何せよ此の會津にも一二と云ふ位な代物なのだからね、昨日快活な彼の越前の商人さんの話した、猪苗代湖の主であつたか知れないと云つた別嬪

などよりは随分優れて居ますからね優れて無かつたとしても、此の野澤町を中心としての西會津地方としては確かに随一であることは保険ですせ。

「あらさう、それ程強いのですか？」

「おつと危険いく、既に見ぬ中から少し心配が起つた様では無いかね……」

「驚いた様に見せて、貴郎のお氣を引いて見ましたのよ、御免下さい。」

「ヒヤア喰つたく。」

「それはさうと貴郎話して下さいな、其御方と其後何うなつたので

したね。」

「奇體ですな——聞き度いですがね、先き程までは勝頼さんをきめ込んでゐたのでしたのに……」

「でも妾なんだか先きまでは聞き度くも何とも無かつたのよ、それがね急に何だか聞き度くなつたのですもの、何に貴郎としてさう云ふことが御座いませう……急に物が慾しくなつたりなんかいたしますことが……」

「心理學の講義、それも——實驗心理學の様な今のお話し實以て感服仕りました。」

「アラ又戯語は止めて頂戴、だつてさうでせうね、すると貴郎と妾

「矢張り均一でせう？」

「さう／＼、ではそれは扱置き、先きの話しを續けることにいたさう……」

「そして頂戴？」

「其暑い夏の日にさ、僕は、アッ僕にしてしまったが其頃は僕と許り云つて居たから、これからお話しは、僕々で通すかも知れませんがからね、其心算で聞いて下さい。」

「そんな説明なんか付けて下さらないたつて良いのよ、妾だつて其位ゐのことは飲込めますからね。」

「さうかね、ちやア兎に角續けて話すよ……前話した通り僕が自轉

「ウムそれだよ。」

「ちやア話して下さいよ、そんなに會津のお話しへ、信州だの甲斐だのなど云ふことを入れないでね、地方的にお話しして下さい

車を持つてね、此の町の鎮守様へ行つて、その森の中で待つてゐたのさね、するとね、此の地方で云ふモンペイ、甲州から信州方面で云ふ猿袴、米澤から奥の地方で多く云ふ要鎮袴さね……多美江さん解つたかね。」

「エ、解つてよ一寸關東地方の普通の股引の様で少し太くなつてゐて上の方が大きく出來てそれが袴の様に二つに別れてゐるのでせう……」

な、でないといふ聞くにくだりしてゐて全然でお爺さんかお婆さんが、尙お酒を召上つた方の様になつて仕舞つて妾あくびが出ますわ。』

「さうだらう——處でね、其娘がそれを穿いて行つて来てね、ぢやア何うぞお願ひします、と云ふのさ、お辭儀も何も仕無いで、それから其娘に自轉車を持たせてね「此方へおいで、ゆらさんこつち手の鳴る方へ」とは云はなかつたが、先づ神社の廣い庭の中で一方の少し小高い方へ連れて行つてさ、石の踏臺を置いてそこから出かける様に教へたのさ、で僕は以前から凡てのことを精神的に骨を掴むと云ふ方法で心懸けであるのだから矢張り其式では無

い此の槻川鐵夫式にね次ぎの様な説明で初めたのだ「何でも足は後の事にして體さへ車の上に乗つて居られさへすれば良いと云ふ考へで居るのですせ、それでさ車は此の少しでも高い處から出なければ五間や八間は必ず廻つて行くからね。其車の上に居て、左りへ落ち相と思つたなら左りへ、右へ墜ち相と見たならば右へと前車の方向を轉じれば良いのだからね、其心算りで把手を握つてゐて動かすのですよ」何うだね説明が上手なものでせう多美江さん……」

「そんなこと何うでも良いんですわ。」

「イヤ實際肝腎なのだからね——」

「それはね自轉車に乗る乗方を教へて貰ふ場合には成程良いでせう……だけど其お方との云々のお話しにそれ程一々委しく話してゐましたなら三日も四日も聞かなければなりませんまい。」

「イヤ三日も四日もたつた日には第一話す方が倦きますせ、聞くお方なんか何うでも構はんが——然し初めは中々手間取るけれどね二三日経つて見給へそれは——頗る速かなものさ、己れなどは習ひ初めて一週間の後には名古屋を飛び出して東京へ向つて来た位ゐだからね、自轉車に關係のある話しだから勢ひ最初は暇がかりますよ。」

「オヤお上手ね、それだけお上手になりましたなら最う此の後は一

時間十五里位ゐから以上なお話しにして下さいな。」

「よし／＼それではさう致しませう、さう云ふ風で毎日一時間位の宛教へてやつたのが三日許り續いたさ、するとねすつかり上手になつて了つて、時偶其娘は兄さんの自轉車に乗つて一里位の處までは使ひに出ると云ふことになつて了つたのさ、多美江さん随分速いものでせう。」

「お早いことね、餘程其方は覺へも良かったのですねえ、だけどお話しとしては今少しお早くして願ひ度いのね。」

「成程、で廿日許り過ぎて了つたのさ。」

「オヤ實際今度こそお早いお話しね、是非さうやつて下さいな。」

「よし／＼すると或夕方（あるゆふがた）のことさ、僕（ぼく）が其娘（そのむすめ）の店（みせ）に一寸（ちよつと）行（い）つて見（み）るとね、娘（むすめ）は僕（ぼく）に話（はな）したのさ、僕（ぼく）は忽（たちま）ち非常（ひじょう）に心配（しんぱい）したのさ。」

「貴郎（あなた）何（なに）うして心配（しんぱい）したのですね？」

「アツさうだつた其理由（そのりゆう）をまだ話（はな）さなかつたね速（はや）すぎて遂（つい）スミスさんの宙返（ちゆうがへ）り以上（いじやう）に飛（と）んで了（しま）つた失敬（しつげい）／＼——それは斯（か）うなんだ、僕（ぼく）を大勢（おほぜい）の青年（せいねん）と土方（ひらた）どが何時（いつ）かなぐると云（い）つてゐると云（い）ふんだらう、で心配（しんぱい）したのさ、けれど何（なに）苟（い）くも關東（くわんと）人のバリ／＼が、牛（うし）の様（やう）な奴等（やつら）になぐられるものか、其時（そのとき）には自轉（じてん）車の全速（ぜんそく）力（りき）以上（いじやう）に逃（に）げて了（しま）ふから大丈（だいぢやう）夫（ぶ）だと思（おも）ひ返（かへ）して又（また）安心（あんしん）して了（しま）つたのさ。」

「で其後（そのご）貴郎（あなた）は何（なに）うなさいました逃（に）げましたか？」

「イヤ逃（に）け無（な）い、それ許（は）りか反（かへ）つて此方（こつち）からヤツつける方（ほう）が良（い）いと云（い）ふことになつたのだ、それは斯（か）うなんだ、僕（ぼく）の自轉（じてん）車（しゃ）乗（の）りを教（け）授（じゆ）したのは敢（あへ）て其娘（そのむすめ）許（は）りでは無（な）い、外（ほか）に町内（ちやうない）で約（やく）二十五（にん）人（にん）許（は）りあつたのだからね、僕（ぼく）を有難（ありがた）がつてゐるのが其（その）人（ひと）たちであつた爲（た）めに、其者（そのもの）等（ら）が相談（さうだん）してイヤとなれば何（なん）百人（にん）でも我（われ）々（ら）が引受（ひきう）けるからと云（い）ふて呉（く）れることになつたんだからね、それが又（また）其娘（そのむすめ）の力（ちから）に依（よ）つてさうなつたのだから實（じつ）に／＼僕（ぼく）は其（その）娘（むすめ）を忘（わす）れることが出（で）來（き）無（な）いのだ。其僕（そのぼく）をなぐるこ云（い）つた奴等（やつら）の主謀（しゆぼう）者（しや）は三人（にん）だつたのさ一人（ひとり）は町内（ちやうない）の某（あ）る青年（せいねん）、二人（ふたり）は當時（たうじ）鐵道（てつどう）工（こう）事（じ）で入（い）り込（こ）んで居（ゐ）た土（ど）工（こう）の帳付（ちやうづ）けなんだらう、それがだ三人（にん）が三人（にん）共（ども）、其娘（そのむすめ）に横戀（よこれん）慕（ぼ）し、

やがつてね、ピンと酷く撒付けられたのだから、それで僕を恨むとか敵とかの様に想つたのだつたと云ふことであつた。」

『では貴郎一人が其お方に好かれたのですねオヤ何かどつさりおこつて頂戴な——』

「それは好かれたさ、何うぞ何時でも妾の處へ来て宿つて下さいな、ほんとですよ、待つて居ますからね、妾の家でも來年邊りから屹度始めるつて云つてゐますからね、實際ですよまつてゐますよ、始めたならば直ぐにもねつてまで云つて呉れた位なもの。」

「さう——何を始めたらとお仰つたのですね。」

「それか——それは宿屋をだよハ、ツ。」

「オヤ——さうホ、く………」

一一一 直實様のお歸り

「只今？」 恁う云つて己れが歸ると、

「直實様のお歸り。」

「直實様のお歸り。」

斯う云つて宿の人々は迎へて呉れる。己れは途とう熊谷の次郎直實にされて了つた。己れと多美江とは遂此の野澤町の野澤館旅舎にこれで五日目の滞在となつて了つた。縁不縁と云ふことを云ふが實際自然の因縁と云ふことは何處にあるか知れぬものである。嘗て先

年自轉車旅行で當地に來た節、圖らずも、此の地の青年諸君に地方で當時甚だ流行であつた自轉車の乗方教授をやつたのが縁となつて遂々豫定以上の長滞在をしてつて「彼のお方は彼の娘に自轉車の乗方を教へるので晝の中は娘を乗せて、夜はなんとかやるのだ」と云ふ浮名まで流したのであつたが其爲め懐かしく思はれて、斯うした新婚旅行の、それもく異風なそれを畫策し、又實行もして來てゐ乍ら、遂平凡な三四日を過ぎて了つたのである。

然し何物かを得やうくとあせつてゐた結果が、己れは又此處でひとつの材料を得ることが出來た、それは此の直實様のお歸り、と云つて宿の人々の迎へて呉れると云ふ、詰り己れが直實にされたといふ

云ふ一事である。

それは當地へ着いて三日目のことであつた。

「多美江さん何うですね、昨夜お話した別嬪さんを見に行きませぬかね。」と多美江に云ふと、

「イ、エ妾止めませう、見度くありません、貴郎お一人で見に行つていらつしやいな。」

恚う云ふから直ぐに出かけて行かうとすると、多美江さんは火急

「オヤ眞個にお出でですか。」と云ふ。
「それは行くのさ。」

『イエお止めなさい。』と云つて騒ぎ出した。然し己れは以前當地滞在中大變に厄介になつた方があるから其方の處まで行つて來るからと云つて、充分云ひ譯をし、説明して出様とするが中々多美江さんは承知しない。『今日はお止めなさい』つて聞き入れなかつたが、漸くのことで十時頃出かけて一人で懐かしい感じのする此の野澤町在の或村へ赴いたのであつた。

其日は恰度空は晴れ渡つて一片の切雲さへ無く、そよ／＼と僅かに吹く風は軽く袖を拂つて快く、野には種々な草花が茂つて、路々足を踏むのさへ熾りの花を踏潰しはせぬかと思ふ程の有様、西會津一番の野澤平原は深緑の樹々の山々に包まれてゐる。鶯は彼方此方

の林の樹の中から、時遅れではあるが、澄み亘る音を傳へて來る。ジ／＼と云ふ煩さいと常には思ふ蟬の鳴き音さへ、何となく快く感ぜられて、宛然極樂浄土をこれこそお釋迦様の御手に引かれて歩いて居る様なものだと思ひ乍ら、何時の間にか一里許りを辿り付いて舊知のお方を訪ねると他出中とのことにはははづれたものゝ、前に云ふた通りの氣持の良さに急ぎもせず、杖を振り／＼半里許りを歸つて來ると、折から飛ばして來た自轉車の一婦人があつたのでハツと思つて良く見ると、先方も直ちに車を降りて己れの傍へ近寄りさま、

『オヤ貴君は槻川さんでは御座いませんか？』

と云はれて良く見ると、己れも確かに見覚えのある様に思はれるので、

「お仰る貴女は？」と云ふと、

「ハイ以前の津野田瀧野です。」

と云はれた。

「ハ、ア然うでしたかイヤ實に暫らくでした、此の槻川鐵夫を良く

お忘れ無くいらしつて下さいました。」

恁んな次第で二人は畑と畑との間を通じる細道で暫らくは昔語りを行つてゐると、その時また一人の自轉車上の人が通りかゝつた。

「島村さん妾遅くなるかも知れんから濟まないけれど、家へ一寸言

傳して置いて下さいな……」

此の時瀧野さんは其通りかゝつた男に云ふと、「承知しました。」と云ひ乍ら一寸己れの顔も見て行くのであつた。

其夕、宿へ歸つて見ると女中さん達が、

「お客さん、奥様が大層なお待ちで御座いますよ。」と云つた。

座敷へ行つて見ると成程如何にも奥様は待遠であつたと見える。

「貴郎妾ほんとに心配してよ、随分遅かつたことね、瀧野さんとの

お話しがそんなに有りましたのですか？」

オヤツと思つて聞いて見ると、島村さんといふ隣り座敷の御客さんから知らせて呉れたのだと答へた。變な御世話をして呉れる方も

あつたものと思つて見たが又考へて見ればこれだけ嫉妬のなら大丈夫と多美江の己れに惚れてゐる戀の寒暖計が圖らすも試験が出来たかと思ふと又、其島村さんも有難く思はれるのであつた。

「それは、嘸々お待ちどう様でした。さがみは障子押し開き……だつたですね。」

其時己れが云ふたのを女中さんが聞いて居たので其爲め己れは直實様にされたのであつた。

一三 飛んだ喜劇だ

「貴郎は今日如何です？」

「またお天氣のことかね……」

「いゝえ然うぢやありませんよ、今日は最う六日でせう？」

「ハ、ア近來多美江さんは何うか爲されましたかね？十日間だけ忘れてゐたね、今日は六月十六日だよ即ち大正八年六月十六日だ一寸年に計餘を付ける……」

「エ、そりやア解つてますが、此の野澤てふちつぽけな町に来てからが六日目でせうと云ふのですよ。」

「なるほど、然うですか、それならさうと始めから目をつけて話して呉れ、ば己れにも直ぐそれは解つたのだ、目を碁盤の様に盛つておくから原稿用紙などもちやんと字數が決定つて易しく書ける

のでせう、目が無いと凡ては蛇と取交つこした蚯蚓の長歌の様に
なつて了ふでせう、此の後は目を落さない様にして下さいよ。己
れなどは先づ以てそんなことは行らないねえ……」

「さうでしたか、それなら妾も申し分がありますよ、昨夜裏町に散
歩したときに貴郎も御覽になつたでせう、彼のフルイね——白い
手拭でハイカラ頭髮を包んで赤い襷で養蠶に働いてゐた娘さんの
手に持つて桑の葉散らして居た彼のフルイですよ、彼れに若し目
が無かつたなら如何ですね、それこそ勘しも桑の葉は下に落ちは
しますまい、目があればこそ下へ落ちるのです、ですから今妾の
申しましたのも、目があつたからおちて了つたのですわ、それを

貴郎は目が無いと思召されたら貴郎の方が妾より何うかしてゐま
すのよ。」

「イヤハヤ何うも何共恐れ入りました、此の間夜汽車までも同行し
た男以上ですわね。」

「それは貴郎が妾を憐れう云ふお喋舌にして了つたのですよ。」

「エッ、これは——今度は何だか嵐にでも成りさうだ、雷も一寸心
配だ、桑原——」

「實際ですよ、妾學校で先生から聴かされた修身のお話して覚えて
ゐますわ、何でも婦人と云ふものは、夫を持つた以上は出來得る
限り夫の性格を觀て趣味なども一致させて行く様に、成るべく夫

に同化して行かなければならぬ……ですから貴郎が滑稽
をお仰るからには、妾も同じ様なことを申しますのですわ。」

「何うも愈々恐れ入りますな、恐れ入るのは又己れ許りではないで
せう——確か歐羅巴ではそんなことを云はなかつたと見えて、ス
ペンサーの倫理學や教育學にはそんなことは見えなかつたから、
女大學式の東洋倫理だね、すると孔子様などが云ひ始めた事だら
うが斯んなに誤解されては堪らない「ア、縁なき衆生は度し難し
だ」など、印度のお釋迦様の眞似ごとでも云つて支那の地下で恐
れ入つてるだらう、ア、實際恐れ入る、そろ／＼梅雨の期節だけ
にあぶないものだぞア、……それはさうと何う仕様、帝國ホテル

や奥州屋それより小さく成つて若松樓だが、尙一層名さへも野澤
館と云ふ千戸足らずの小町を代表する旅館だけに、費用も案外か
からなければ至つて氣輕に入出も出来る、宛然伯父さんの家から
飛び出してまたお馴染の家へ行つた様な氣分なので遂ひ浮々と遊
んでは居たが、愈おさらばと宗五郎でも極込まうかね。」

「エ、——ですけど今日一日は何處かへ散歩にでも行つて來て暮ら
しませう、最う御覽なさい十一時ですよ。」

懷中時計を見ると全く十一時であつた。それならと云ふので兩人
は直ぐに仕度を頼んで少し早かつたが晝食を済まして出かけたのは
既に正午と云ふ時であつた。

「貴郎……。」

「何ですな？」

「妾何だか氣がそわ／＼して堪らないのよ。」

「それは結構。」

「あらさう——ア、結構と云へば結構な日光は意外でしたねえ……。」

「さうだつた、全くだつたよ、遂彼んなことで見物を止めて了つた
つけね。」

「だけど妾別に見物したいとも思ひませんでしたわ……。」

「何うして……。」

「彼んなどく／＼しい様な自然と人工ね、妾餘り好かないのよ、そ

れよりね此の邊の風景などが凡て妾好いわ……。」

「さうかね、己れも先づそんなものだね、己れは第一彼んな神様だ

なと、云つてゐ乍ら錢など取つて見せると云ふのが氣にくはない

よ。大神宮様だつて錢など取りはしないぢやないか？ 錢を取つ

て見せるなんとは全然で見世物小屋の行方と同一ぢやないか、そ

れで活辯の様にお世辭でも云つたなら何うかとも思ふが其癖案内

人まで勿體振つてゐておまけに頭を下げさせるのだから己れは何

うしても好かない……。」

「さうですか、妾も何時かそんなことを思つて居たことなどもあり

ましてよ。」

「イヤ然し斯んな話しは止さう、それより多美江さん何うだね」と
つ草花でも集收めては。」

「エ、さうしませう……」

兩人は此の時は既に雜樹林や畑などの間を過ぎて餘程の道程を歩
んでゐた。

「貴郎、もう妻たちは餘程参りましたのね。」

「さア一寸半里かね。」

「さうですか、阿賀野川まではまだ遠いのですか。」

「なに知れたもんだよ。」

「オホ、貴郎知れたものてふ言葉を覺えましたのね、それは何の

位いのことですか。」

「さア、一寸六ヶ敷い質間だね、覺えたと云ふことは以前全然覺え
てゐたのだつたが、又此の會津滞在で復活した様なものだよ知れ
たものと云ふのは、所謂エ、澤山ちやありませんとか、なに少し
許りですとか云ふ様な、兎に角僅かであると云ふことなので、時
には道程ならば五六丁内外のこともあらうし、又場合に依つて五
六十里或は千里までも人に依り場合に依ては云ふのでせう……」

「さう、ちやアまるでゾムの様ですなえ。」

「そんなものさ、で時に又時間、高低などの様な凡ての量のあるも
の、又はあると假定するものしてあるものを云ひ現はす場合に用

ひられる様ですよ……」

「さうですか……一寸貴方此の花は何。」

「此の時多美江は一ともの草花を採つて己れに差出して云ふのだつた。」

「さア、己れには知れんね。」

「さう……妾覺えて居る様に思はれますけど口に出ませんわ……」

「何せよ良い花ね。」

「美しいな、澤山集めて行き給へ、歸つて女中たちにも聞いたなら大抵のは知つてるだらうし、又地方的な名詞とか、土地に依つて同じ種類のものも變つてゐるとか云ふ様な發見などもあるだらう。」

う。研究したなら面白いものだらうせ。」

「全くですわね……」

「オ、貴郎もう河ですわ。」

「さうだ、早かつたね。」

此の時兩人は河岸近く斑らな樹立の中を歩んでゐた。

「此の邊から下りて見様ぢやないか——多美江さん降りられる。」

「此の細い坂路をですか。」

其處には至つて細い道が樹の間から河原に向つて通じてゐた。

「さうだよ、本道を廻つて行けば良いのだけれどね、それはまだ此の道を確か五六丁も河上へ登らなければならなかつたと思ふから

ね、何うだね。とつ降りて見給へ、大丈夫だよ落ちた處で上には落ちんからね、まして鐵夫さんが付いてゐるから、眞逆墜しもしないさ。」

「さう——では降りて見ませうか？……だけど何だか危険い様な気がしますわ。」

「大丈夫く、來給へ來給へ。」

云ひ乍ら己れは先きへ其道を這入つて下り初めた。二間許り遅れてゐた多美江は僅かに降り始めた時、

「貴郎大變です、これを持つて頂戴な。」
つて手にした草花の束を差出して云ふ。

「良しく持つから待ち給へ、又登つて行くのかなア、さア貸してくれ、ちやア行かうよ。」己れは一寸戻つて花を受取つた。

「貴郎着いて行つて下さいな。」

「さうか弱いね、矢張り高山の無い平原地に育つたものは獨立心に乏しいとか云ふが實際だなア。」

「妾獨立心なんかなくつても構ひませんわ、何うせ貴郎の爲めに生きる妾ですもの、貴郎がなかつたら妾もなくなつてよ、だから構はないのよ。」

「何うしてね。」

「さうでせう、ホラ何時か云つた通り若し病氣にでもなつて貴郎が

死んだ時は妾も同時に行きますつて？」

「マアいゝわゝ……アツと危険いゝ、成るべく樹に取付いて降り給へよ。」

「ハイさうしませう……」

兩人は無事に河原に下つた、そして歩んだ。河原には種々状々の石が流れて、一面に大小の砂利を爲して岸に長く續いてゐる。河はサラ／＼音を立て、岩石を嚙んで流れてゐた。兩人の足は度々歩みを止めるのであつた。

聽て間もなく渡船場に出た。色は黒く髪は延び髯は顔をうづめてゐるが、案外人の良さ相な渡し守の男は忽ち此方の希望通り兩人を

對岸まで送つて呉れた。五六寸と思ふ雑魚などが深く遊ぶのである。が舟の中で水中深く見えるのであつた。

岸に立つた兩人は今過ぎて来た方を見ると急角度の岸には何れもこれも同じ様に河中に向つて延びた樹林で、それが河上にも下流にも長く續いて見える。兩人が降りたのは彼の邊かと思ふと多美江さんまでが良くあんな坂を降りられたと思はれるのであつた。

兩人は足を叢の中へ運んで入つた。

「貴郎、今渡つて来た道を行くと何處へ行かれるのですね、彼んな一間許りの細い道……」

「彼れかね、あれを行くと山都停車場の方へ行くのさ。」

「さう、では此の間妻たちが夜汽車で来た時物凄い音が長く続いた
り度々静かに成つたり又激しく響いたりした方なのですか。」

「さうだよ、喜多方から野澤までの間が岩越線中でも特に橋梁や隧
道が多いのだからね、で此の長く続いた別な音は彼れは高いく
ピーヤの上の鐵橋だと云つて此の間話したらう……」

「ア、さうでしたねえ。」

「何うだえ、今日彼れの見える方まで行つて見様かね。」

「近くつて……」

「可なりあるね。」

「知れたもんでは無いですね……」

「多美江さんも覺えたね、さア一寸不明らんが何でも約二里も行け
ば見えたと思ふね。」

「大變ですく止ませう……」

「止め様、また都合に依ると彼方へ出て行かうとも思つてゐるんだ
からなあ。」

此の時、多美江は一方を指して驚いたと云ふ風で、

「アラ、居ましたよ」と云ふ

「何にか〇見ると一匹の縞蛇が所在を知られて今逃げ出した。火急
て、己れは走り寄るが早いかハツと尾の先きを搦んで引立てると同
時に、ブーンと一振り宙に振ると左手で頭を持つて、

「何うだね。」

「アラー——」

と云つて又驚いたか大變な聲を立て、今度は長虫で無く女が逃げ出した。

「逃げることは無いよ、そんな聲はお止めよ。他人でも聞いたら心中の行り損なひかと思ふよ。」

三四間も逃げた多美江さん漸く此の時、呼吸を吹き返した様に振り返つて見て、

「早く捨て、頂戴よ妾大嫌ひだもの……」

「多美江さん大嫌ひでも己れが大好きだから仕方が無い、紙をよ越

して呉れよ、包んで行つて今夜喰べるのだから。」

「エッ……」

と云つて此方へ來かゝつて居た多美江さんは又立止つて、悲し相に云ふ。

「イヤですく、そんなこと止めて頂戴よ後生だから……」

「五升や六升の米を喰つたより以上なこれは人間の薬なんだよ。」

「オホ、……いゝえ何でも止めて頂戴よ……」

「處がだ、實際喰つて見ると今度は妾にも最僅と呉れて頂戴よになるぞ……」

「そんなことはありません。」

明瞭云ひ放つたが其顔を見ると、宛然で御祝儀とお葬ひを一緒にした様な六ヶ敷い有様だ。

「第一多美江さんは今朝も云つたぢやありませんか？ ホラ同化同化と云ふこと——考へて見給へ静かに——そして己れの好みに同化し給へよ。」

「妾それ處ぢやないわ、銅貨でも有つたら投げ付けても蛇の處なんか逃げるのよ。」

「ヒヤ／＼戯談が出る様になつては占めたもんだ——一時は驚いたよ、既に此方のもんぢやないか位に思へたのだつた。先づ安心した、幸ひだつた、多美江さんが此方のもものになつたら見給へ蛇

は既に彼方のものに成つてゐる、差支へも足止めもありやしから最う傍へ來給へよ。」

「捨て、下されば参ります……」

「困るね——まだそんなことを云つて居るのかね、ぢや一とつ話すことがあるから、其處の石に腰でも懸けてゐてゆつくり謹聽し給へ。」

「妾懸けませんよ。」

「何うして……凡て立聞きと云ふことは良くない、場合に依ると民法第何條とかにふれるさうだよ。」

「構ひませんわ。」

「それなら己れも其れは構はんからマア聽き給へ、委しいことは今夜喰へ乍ら話すことにして略して置くが、己れが嘗て越後糸魚川の中學校に於いて校長の希望に従つて生徒の前で此の縞蛇の生まを喰つて見せた時、初める前に説明して職員たちから然り／＼賛成／＼の言葉を浴せられたそのことを此處へ引用して聽かせて上げる嫌ひと云ふのは只感情に走るからだ、見給へ世界中には蛇を常食の如きもの、中に入れてゐる處もある、又日本人などもこれが河か海の長虫でもあつたなら幾程も喰つてゐるぢや無いか、或は佛法染味た殺生云々を主張する者もあるかも知れぬがそれも誤つて居る、精的心的の別こそあれ米麥も同じ生物であるが皆人間

はそれを石川五右衛門登茹の極刑に處して常食としてゐるでは無いか？ 何うちや多美江さん冷静に考へて見給へ……」

此の話しに多美江さんの六ヶ敷かつた顔も次第に解けて來て果ては感心して了ふ。歸り路などでは其包を妾も持ちませうなどいふ程になつてゐた。然し蛇の騒ぎに折角澤山に集めてゐた花の束は投げ出して其儘忘れて置いて歸つたので、草花の研究はゼロに終つて了つた。

其晩兩人は其蛇の好物を味ふといふ譯で晩食は三時間も前に済ました、九時半頃、業々七輪に火を貰つて焼き始めた。其時隣り座敷では酒宴で大賑ひ、

「すまだむしめとお寺の鐘はちけばちく程音が出る」

などいふ奥州辯全出しの歌なども聞えれば皿や膳を叩く音などもする、島村さんや宿主公の聲もすれば強い女の聲なども聞える。漸亂ちきが大きくなつて来て時偶私たちの境である唐紙などに衝當る物音もしてゐる。其時一人の女中は私たちの室へ這入つて来て、「オヤお客さん何です、御馳走ですか？」

といつて焼いてゐる長虫を見て聞く。中々明さずに居ると紅い顔を突出して鼻の先きで香りを嗅いで見などして益々訊く。それから己れが一寸お愛嬌の様な氣持ちで、

「山うなぎ……また蛇……」

ど、キヤツと叫んで女中君大井へ着くかと思ふ程飛び上つて落ちてドシーン、

「ヤア〜何だ〜」

「お花さん、お春さん、何だ〜……」

どしく隣りの人たちが這入つて来て隣座敷の亂ちきはパツと消えて己れの處が大變な大入りだ。己れか徐ろに短かく事情を語ると、

観客中に在つた宿主公一同を觀廻し乍ら、

「そりやア飛んだ喜劇だつた……」

「ワハハハ、」

「ハハハ、オホハハ、」

「オホ、、、アハ、、、。」

一四 だまつておいで

翌る日は降雨だつた。おまけに人に依つては出發ないといふ七日目だつたけれど、なに滑稽の種子でもあれば幸ひ位な心算で、私たちは名残惜しい西會津を辭したのであつた。一聲の汽笛が響き渡ると列車は動き始めた。

「御大事に。」

「御幸福で。」

などの言葉を耳にして兩人は身を東行の列車に任せた。僅か進んで

一路の踏切りに差懸つたとき、片手に自轉車を支へてモンペイの姉人が白い布を高く捧げて道路に佇立したのが圖らず兩人の目に留つた。

「おや貴郎今のは津野田さんでは無くつて？」

「さア……或はさうであつたかも知れない……。」

「……………」

「……………」

「彼のお方は何と思つてでせうね……。」

「何でも無いよ、日本の女性的な判断を下すのは止め給へ……實際會津地方の人は情に厚いからね、たい善意そのものだよ……。」

「さうでせうかねえ……」

潤つばい空気が室内まで襲ひ入つて夏の日も宛然春若い冷氣を包んでゐる。客の人々の手足は多くは衣の中などに陰れて見えた。折から列車は汽笛の響きに次いで激しい音響と共に小山の中に突撃するのであつた。パツと明るく成つたと思ふとまた笛が鳴る。次いで再び暗に物凄く突いて這入つて行く、と明るく成つて幾分が冴えた音響の中に急流の河上を渡つた。斯くして列車は東へ東へと進むのであつた。

兩人は今日許りは二等車に乗つてゐるのである。最初の東京出發から此の間までの旅では何時もく三等車の混雑の中に乗つてゐ

たが、ゴツ／＼した着物を着た田舎の女や男が、無遠慮に擦寄つたりなんかしては、折角の花嫁である多美江さんの大事の黄縞のお召などもともすると土ろ綺にもなり相なので、多美江は時々餘計な心配もする、それ許りでは無い、毎日に軽くなつて行く財布の事などを思ふと己れまで實際心配がちやつとは起きる、それでも汽車賃を多く拂つて了ふと矢張り財布はお軽さんで勘平さんの腹切りをする役者以上に辛いとは思ふけれども偶には中流社會の吾々だからと見えを張る必要もあればまた體を緩り兩人で甘い言葉もちつとは交はすのも妙だらうと、遂舊知の人々の多い地の今度の出發はと二等列車に奮發したのであつた。

十幾本のピーヤが高く、築かれた其鐵橋を渡る時、たゞ僅かに多美江さんが恐怖の色を示した許りで、霞に包まれた山や谷の間を、進んで喜多方に近付いたとき、

「貴郎此の地方にも鑛山がありましたでせう。」

「有つたね、然し現在は所謂廢鑛だらう。」

「さうなの……」

「何かそれが多美江さんに縁故でもあるのかね……」

「いゝえ何も無いのですけれど一寸たゞ記憶にあつたと思ひますのよ、何かの本で見たことがあるのです、それでお尋ねして見たのよ……」

「さうかね……何か話材でもあるのかと思つたらそれでは満らなかつたね。」

兩人は憊んなことを語り合つてゐた。

喜多方に出ると再び會津平野は南から東の方へ展けてゐる。然し霞深い今日の日はそれが非常にせばめられてゐた。やがてまた列車は其平原を走つて行く。憊うした日に何と無く安底のない様な汽車の旅を續けてゐるのであるが、それでも私たちの精神は少しも沈んで居ない。晴れくした澄んだ大空を流るゝ星の様であつた。

「貴郎、最う今のが若松でしたねえ。」

「さうよ、ホラまだ市街の一端が見えて居るだらう？」

「さうね、妾若松も見度かつたのねえ、白虎隊の墓なども訪ひたかつたわ……」

「然うかね、己れも見せたいとは思つたのだつたけれど何うしてか野澤へ行つたら心持が緩んで了つてね、遂出かける心算にならなかつたものだから止めて了つたのさ、汽車で丁度往復するとか、乃至は途中此處にも一二宿は是非仕様とは思つて居たのだつたがね……いゝさまた來様ぢやないか？」

「此の旅行にですか？」

「さア、今度は止め様よ。」

「では來年の夏邊りですか？」

「左様……何時でも來たい時に來やう……」

「さうね……」

「……………」

「オヤ、貴郎汽車が變な方へ行くぢやありませんか？」

「何うしてね。」

「でも何だか北の方へ行く様な氣持ではありませんか。」

「然うさ、一寸北の方へ向いて行くのだ、喜多方までは殆んど眞東から僅か北へ向つて喜多方から又南東へ走つて、それから今度は又一寸北東に行くが又直ぐに東へ向ふのさ。」

「あらさう……大層委しく御存じですことねえ、卒業さんだけある

のね……オホ、……」

「止め給へ〜」

「……………」

「……………」

暫時兩人は沈黙を續けてゐた。何かの雑誌を讀んで兩人の近くに居た官吏らしい男は讀み倦きたらしくそれを閉ぢて側に置くと火を點けて莨の煙を吹ている。五六名の他の客も何れも倦怠の色を見せてゐる様であつた。

廳で廣田大寺などの驛を過ぎて磐梯山下の湖に近く列車は走つてゐた。

「貴郎猪苗代つて中々好いのね。」

「然うよ、中々好い自然美のある處だよ。」

「妾此の間晝に通つて良く見たかつたわねえ。」

「今見えるぢやないか？」

「それは見えますけど、何だか彼方岸などは明瞭と解らないぢやありませんか。」

「それは然うだね……然し其替り神秘的なところが、尙一層深く味はれて反つていゝぢやないかね、凡て物事は神秘そのもの、含まれてゐる方が面白いぢやないかね。」

「それはさうねえ……」

「深く記憶に止めて置く様に、多美江さんは沿道の風景を熟く御覽よ、己れは今神秘と云ふ言葉から一寸何物かを発見でも出来さうな感じが起つて来たから少し考へて見るから……」

「さう……妾も見たり考へたりしませう……それはさうと貴郎此のことだけ一寸御話して置いて下さいな。」

「何ですかね？」

「今夜の宿りです。」

「然うだまだ確然決めて置かなかつたね、さあ……飯坂温泉に仕様ぢやないか？」

「さうね、福島との二ヶ所の中としては其方が妾も好さ相に想ひま

すわ、市だとか縣廳所在地だとか云ふ土地は多くは平凡で満らな
いわ、さう致しませう、貴郎の思ひ出の多いといふ飯坂温泉場に
ね……」

「よし……最う暫らく無語つて居給へよ。」

「ハイ……。」

大きくもない聲で話し合つてゐた再人は其後暫らくは再び沈黙を
守つてゐるのであつた。——と何だか確かに或る超人的な一種の
プラマス（眞理）でも発見した様な気分であつたのが少し方角でも
變更した様な具合ひであつた、たゞ次ぎの様な感想が起つて来て、
それがくるり／＼廻轉してゐる様に思はれるのであつた。

それは眞理追求者といはれてゐる印度人中で、又特に然る方ともいはれ様近來有名な詩人タゴールがヒマラヤ山に攀ち登り乍ら感じたといふそれに近い、聖者生活にでも這入つて行く様な氣分がしてそれがまた轉遷的にくり返さるのであつた。

一五 晴れるまで

兩人は其夜は福島市の停車場近いとある旅館に旅の夢を結んだ。といふのは岩越線を貫けて郡山に着くころから、雨は急に激しく降り出して福島驛に下車した頃は大した大雨であつた爲めに遂々飯坂温泉行を止めたのであつた。

翌る朝のことである。

「多美江さん今日は何うだらう？」

「さうね、晴れるかも知れませんか……」

「何う云ふ理由でね？」

「何うつてふこともありませんけれど……妾なんだかさう想へてよ……」

「成程、オ、今は大ぶ小降になつてゐる様だ。」

「晴れるでせう、屹度さうだわ……」

「そんなに晴れ相に想へるかね？」

「さうです、だつてね——神様だつて私たち兩人を屹度喜ばせる様

にして下さるでせうから……」

「それは又何ういふ譯だね。」

「だつて然うでせう、こんな交情の良い二人を苦しませる様なことないと思ひますわ……」

「またお安くないね……」

「でも妾此の頃毎日楽しくつて仕方がないのよ。」

「何がですな？」

「何でもないのですけれど、眞個に愉快でくたまらないんですもの……妾もう斯んなに貴郎と兩人で楽しい想ひを續けたからには死んで了つたつて構はんと思ひますわ。」

「馬鹿な……新婚旅行は多美江さんそんなものぢやないだらう……最後の勝利とか最後の福音と云ふのが新婚旅行ぢやないせ、これから新しいものを築き上げる根底だらう、そんな言なんか縁起でもない止し給へよ。」

「御免下さい……妾餘り何を見ても聞いても何しても嬉しくつて嬉しくつて堪らないので遂あんなこと言つて了つたのでした、ね許して頂戴ね貴郎鐵夫さん……」

多美江さん感極まつたと見えて遂とう眼から大粒の涙をタツタツクッ。

「止め給へく、斯んな雨の降る日などに泣いてなんかゐると誰だ

つて悲しくて泣くとしか見やせんせ、兩人の交情の密いことは今更云はんだつて解つてゐるぢやないか、オイ誰か來る様だせ。」

「アラさう……」

火急で、多美江さんは涙を拭いて笑つて見せて、

「貴郎僞語よ……誰も來やしないぢやありませんか、最少し泣かせて下さいな、妾嬉しくてく堪まらないんですもの……」

「だつて泣かないでも良いぢやないか、又後でも嬉し泣をする様に少し残して置き給へよ、ホラ彼の湯本へ行く時の汽車の中で、半分笑つて残りをしまつて置いたらう、其残りの笑ひでも今出して笑つたら良いだらう、然うし給へ。」

「オホ、さうね、では嬉し泣きも又残して置きませうねえ……。」
折から廊下傳ひに人の來る氣配がした。間もなく通りかゝつたのは女中さんであつた。

「オイ姉さん一寸……」

「何ぞ御用で御座いませうか？」

入口のところに中腰で掌を支いて女中さんは答へた。

「イヤ、何でもないだが、天候は何うだらうね、晴れませうか？」

「左様で御座います、晴れるで御座いませう、先程もお客さんからお尋ねがありました。旦那さんが晴れませうと申して居りました。妾は此地方はまだ解りませんですけれど……」

「然うかね、有難う……」

「外になんぞ御用は御座いませんでせうか。」

「さア。」

と云つて己れは多美江さんを見返つて、

「では計算を頼まうかね？」

「エ、お頼み申した方が良いでしょう。」

「さうか。」

「ぢやア、姉さん計算を頼みます、直ぐに出かけられるか何うか、それは解らんけれどね。」

「左様ですか、では申します、何うぞおゆつくりお休み下さいませ。」

女中さんは歸つて行つた。

「貴郎彼の姉さんまだ此處へ来た計りの様子だわねえ——」

「さア、然うらしかつた、若し滞在にでもなる様だつたら身の上話しても聞いてやらうよ、奥州言葉でないのを見ると一寸深い小説的な話でもあるだらうせ。」

「さうですねえ。」

「多美江さんでは、直ぐにも出發出来る様にして置いて呉れ給へ。」

「然ういたしませう——」

と云つて多美江さんは仕度に取り掛つた。折から女中は計算書を持つて来る。仕拂ひを濟ませて兩人は何か特別な大きいことでも期待

する様に、雨の止むのを待つのであつた。

一六 奥のほそみち

それから二時間許り経つた十時少し過ぎ兩人は停車場に出ると、鹽釜行きしほがまゆの切符きっぷを求めて愈々松島見物いよくしまつしまけんぶつとして列車れつしゃの人ひととなつたのであつた。列車は動き初めた。間も無く一道だうのレールは左手ひだりてに別れて延びてゐる。

「貴郎彼の線は何處へ行くのです？」

「奥羽線だよ。」

「さう……では米澤から山形秋田の方へ通つて青森へ行くのね。」

「然うだよ。」

「貴郎は彼の線も全部知つて？」

「知つてゐるさ、通つたから大體は覚えてゐるよ。」

「さう……好いことねえ、妾も何處もかも通るだけなら通つて見た
いわ……」

「通つて見たら好いだらう……」

「貴郎が伴いて行つて下さる？」

「それは行つても良いさ……何處までもだもの。」

「妾嬉しいわ……」

「時に多美江さん見給へ、彼れが信夫文字摺しのぶもじずりで有名な信夫山だよ。」

「何れですか？」

「彼れだ彼の孤立した丸い様な山だよ。」

「さう。」

「彼地に文字摺石と云ふのもあるのだよ、福島から確か一里半程と
思つたね。」

「さうですか、妾見度かつたわ……」

「いゝさ又何時でも此處いらまで来る位ゐのことは譯はないではな
いか、東京から一日あれば來られるんぢやもの……」

「さうね、ではこれも知れたもんだわね……」

「さう〜。」

「……」

「……」

間もなく列車は一筋の流れを渡つた。

「オ、多美江さん、今の河は摺上川と云ふのだつたせ。」

「さうでしたか、小ぼけな河ね。」

「さうさ、細い流れだよ……ところで彼の昨日雨が激しくなければ
行つて泊まるのだつた彼の飯坂温泉は彼の川の水上なんだよ、ア
ッ見える〜ホラ彼方に山の近くに少し人家の集まつてゐる處が
見えるだらう。」

「彼方ですか？ 何だか小さなところねえ。」

「イヤ最少し大きいのだがね、此の邊からはまだ全部見えないのだよ。」

「さう、あゝ、貴郎の本で彼地で書いたものが一冊ありましたねえ。」

「ある、けれど彼れは彼處から序文だけ送つてやつたのだよ。」

「さうでしたか、妾ね貴郎が思出を持つところだと申しましたから長く滞在でもしてゐて全然彼處でお書きになつたのと許り思つててよ……」

「思出は別なのさ。」

「さう、ではそれ何なの。」

「いや、それは止めて置かう、一寸スークレット（秘密）があるの」

「だから……」

「満らないのね——」

此の時又雨は降り出して來た。人々は起つて窓を閉ぢるのであつた。今日は珍らしく客が少ない、そして三等車であり乍ら比較的下流の人々が少ない。彼方の端の方などには二人の角帽の書生さんなども見える。でも空いて居る爲めでもあらうか横に臥して一人で一席を占めてゐるものなども幾人か見える。兩人は今日又此の汽車賃節約を行つたのであつた。然しそれは斯うである。上等な席でゐたところで、混雑しないことゝ幾分清潔であるだけのこと、反て單調すぎて旅の様な氣持がしない。それよりは種々状々の客の中で混

「亂してゐる世の有様が聞かれ見られる方が私たちには餘程有益であるのだから……。」

「暫らくすると列車は宮城縣下に入つて越河の驛も越えた。己れと多美江とは此の頃非常に旅馴れて了つて、人々が聞かうと聞くまいと、笑つて罵らうとそんなことに頓着せぬ様になつてゐるのでまた兩人は語り續けるのであつた。」

「多美江さん……己れが例の雑誌へ匿名で書いた彼の奥州孫太郎虫の云々を知つて居るかね？」

「エ、存じてゐます、さう何でしたつけねえ一寸ローマンチックなお話があるのですでしたせう……。」

「さうだ、處が彼の事件の有つたのは直ぐ此の先きなんだよ。」

「さうですか、何んなところなんです？」

「詰らん處さ、鐵道開通前は良かったさうだけれど、今は平凡な小宿驛に過ぎないんだ。」

「さう……見えまするか此の汽車の中から。」

「見える、確か二階造りの一寸高い建物である小學校などが見えるだらう、然うく小學校と云へば其學校にはね一人異風な女教師が居たつたよ……。」

「何う云ふ風に異なりましたか？」

「所謂粉箱先生と評されて居たが、それはく頗る付きのハイカラ

でお白粉をコテ／＼塗りたてゝね、それに性格と來たら男性的なのだから振つて居るよ。」

「さう……で何か外にもお話しがあつたんでせう……」

「ある／＼随分ある、其學校へ來て以來誰一人其女教師が素顔で一分間でも居たのを見たことがないと云ふ話しだつたよ。」

「それきりなんですか、お話しと云ふのは。」

「然うだ、それで粉箱先生の尊號を奉つたのだと云つて土地の人が話してゐたつたよ。」

「何です満らないんですね——」

「アッ、これは了つた。」

「貴郎何うなすつて？」

「其粉箱先生の居る學校などは遂うに過ぎて了つてゐた。もう間もなく白石だよ。」

「オヤさうでしたか。」

其日兩人は鹽釜へ着くまでの汽車の旅は、至つて單調に過ぎた。平凡であつた。晴天ならば下車して、訪ねても良いと云つてゐた、白石町の白石噺しの舊跡も下車を止めて訪はなかつた。白石から槻木までの山に圍まれた河岩の小平野では處々緩やかに雨の中を動いてゐる農夫などを見た。山や野は緑深くまたそれが雨霞に包まれてゐた。亘理からは仙南の海近い平原を列車の勢ひ良く走るのであつ

た。また今日も多美江さんの主張に従つて仙臺には降りず、直ぐに鹽釜の海岸へ飛ばしたのであつた。

鹽釜へ兩人が下車した時は幸ひ雨は止んでゐた。俥に乗つて宿に行く道々では色の黒い筋肉の張つた男や女が大きな聲を出して話しかつてゐるのなどが多く見えた。

兩人は夕宿を出てビシヤリ／＼打ち寄せる浪波の近くにまで暫時散策して歸ると、室には宿帳と硯箱とが置かれてあつた。

「貴郎、此の頃は餘り平凡だわね、嬉しいのは矢張り嬉しいけれど……」

「然うさ、實際昨今笑ふことも少ないな、何うちや一寸振つて今夜

は兄妹にならうか？」

「さうね、面白いでせう……」

一七 苦しかたわ

兩人がお湯に入り晚餐を済ませて繪葉書を並べたて、話して居た時であつた。

「イヤー槻川君暫らく。」

「ヤツ、驚いたせ川侯君か……暫らく……」

「驚くことはないぢやないか、君だから眞逆に悪い事も爲まい？」

「さア餘り悪いこともせぬが、然し人は解らん者ぢやからね……」